

—茨城県土浦市—

赤弥堂遺跡（中央地区）

—県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）—

坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房Mog i

—茨城県土浦市—

赤弥堂遺跡（中央地区）

—県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）—

坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房Mog i

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川など、豊富な水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。このような遺跡は、当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のために大切なことでもあります。

この度、上坂田地区と下坂田地区において大規模な畑地帯総合整備事業が計画され、今年度は下坂田の赤弥堂遺跡など、記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の結果は本文に記載されているとおりでありますが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成 22 年 3 月

土浦市教育委員会
教育長 富永善文

例言

1. 本書は茨城県土浦市下坂田（旧新治村）1,351 番地他に所在する赤弥堂遺跡（中央地区）の発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi が実施した。
3. 発掘調査面積は 2,300㎡である。
4. 調査期間は、平成 20 年 11 月 12 日より平成 20 年 12 月 28 日まで実施した。また、出土品の整理作業及び 報告書の作成は、平成 21 年 9 月 12 日より開始し、平成 22 年 3 月 10 日まで実施した。
5. 発掘調査は現地調査を荒井英樹・長谷川秀久（発掘調査員）・大久保隆史・川口和之・大賀智章（調査員補助）が担当した。整理作業は大賀健・大賀さつきが担当した。
6. 発掘調査の参加者は以下の通りである。（敬称略）
大塚惣市 中川茂之 山口豊 山藤直樹 小野豊 吉田みち 塚本芳枝 榎戸徹 糸賀文子
中川裕 平林敬子 小角みや子 金塚暎 山崎一義 中川俊三 栗原孝 箱守よしい
植木昭子 齋藤京子 長南節子 渡辺由美子 斉藤与志朗 中村薫 中島貞雄 中島秀雄
中島トミ子 市原チヨ 沖日出夫 露久保三郎 海老原龍生 高野正行 榎戸洋子 高野和子
7. 整理調査は有限会社勾玉工房 Mogi において行い、参加者は以下の通りである。
遺物基礎整理作業 根本時子 篠原美代子 稲坂なお子 石津弘子 伊藤久美子 前田やす江 小山郷子
須賀澤一憲 越川範子
遺物実測作業 大賀さつき 上田敦子 阿天坊弥生 石橋明子 饗庭紀子 広井さやか 小山郷子
デジタル編集 川口和之 岩谷大吾 岩崎美奈子 塩澤佑介 橋辺明子 大賀智章 大賀文香
事務・経理 宇佐美薫 Galvez J Evangelista
8. 本報告書に用いた遺構写真は、荒井英樹・長谷川秀久・大久保隆史が、また整理作業における遺物写真は、一部を川口和之・大越直樹が撮影し、その他は（有）スギハラに依頼した。
9. 執筆分担
第 1 章第 1 節 黒沢春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）
第 1 章第 2 節 大越直樹（有限会社勾玉工房 Mogi）
第 2 章第 1 節・2 節 関口満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）
第 3～5 章 大賀健（有限会社勾玉工房 Mogi）
10. 遺跡の航空写真は株式会社スカイサーベイに依頼した。
11. 本報告書に関わる出土品及び記録図面・写真等は、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。
12. 本遺跡の略号は ASSE（赤弥堂遺跡中央地区）とした。遺物の注記もこれに従っている。
13. 本遺跡の発掘調査から本報告書の作成に当たり以下の方々にご協力をお願いした。ここに記して感謝の意を表すものである。（敬称略）
阿部芳郎（明治大学教授）西本豊弘（国立歴史民俗博物館教授） 齋藤弘道 上守秀明 篠原正 林田利之
石山啓 土浦市教育委員会 比毛君男 及川謙作 茨城県土浦土地改良事務所 土浦市産業部耕地課
有限会社カワヒロ産業 佐々木建設株式会社 茨建航業株式会社 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
株式会社マツイ商会 株式会社スカイサーベイ

凡 例

1. 第1図は国土地理院土浦2万5千分の1地図常陸藤沢を用いた。
2. 本遺跡の報告書に用いたスクリーントーンは以下を表す。

遺構図版	焼土	炭化物	土器	貝	石器	鉄製品
遺物図版	繊維混入土器	赤彩土器	黒色処理	煤付着		

3. 本遺跡の報告書に掲載した遺物写真は、実測図の縮尺に合わせて掲載している。
4. 本遺跡において検出された遺構が欠番になった場合、遺構番号の振替は行わず、調査時の番号のままて報告している。
5. 本遺跡中央地区の遺構については平成21年度調査された西地区と合わせて詳細を報告することとする。
6. 遺物の注記に用いた略号は以下の通りである。

遺跡名	ASSE
住居跡	SI 土坑 SK 溝 SD ピット P
	尚、貝塚は何れも住居内貝塚であったために、1号貝塚は1号住居跡(SI01)、2号貝塚は2号住居跡(SI02)、3号貝塚は3号住居跡(SI03)とした。

7. 本遺跡出土遺物の修復にはセメダインC及び樹脂材のアラルダイト5112・5113を用いた。
本報告書における実測図は全体測量図500分の1、グリッド網図1,000分の1、遺物は2分の1、3分の1、4分の1の縮尺で掲載した。尚、一部の遺構・遺物に変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。
8. 堆積土層の観察及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。

目次 本文目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経緯と調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経緯	
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の方法と標準堆積土層	
第1節 調査の方法	
第2節 標準堆積土層	
第4章 出土した遺物	
第1節 縄文土器	
第1項 2区住居跡出土遺物	
第2項 2区土坑出土遺物	
第3項 2区遺構外出土遺物	
第4項 3区遺構出土遺物	
第5項 3区構外出土遺物	
第6項 4区	
第7項 5区	
第2節 石器	

挿図目次

- 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡
- 第2図 遺跡全体図
- 第3図 2区遺構出土縄文土器(1)
- 第4図 2区遺構出土縄文土器(2)
- 第5図 2区遺構出土縄文土器(3)
- 第6図 2区遺構外出土縄文土器
- 第7図 3区遺構出土縄文土器(1)
- 第8図 3区遺構出土縄文土器(2)
- 第9図 3区遺構出土縄文土器(3)
- 第10図 3区遺構出土縄文土器(4)
- 第11図 3区遺構出土縄文土器(5)
- 第12図 3区遺構外出土縄文土器
- 第13図 4区遺構出土縄文土器(1)
- 第14図 4区遺構出土縄文土器(2)
- 第15図 4区遺構出土縄文土器(3)
- 第16図 5区遺構出土縄文土器(1)
- 第17図 5区遺構出土縄文土器(2)
- 第18図 5区遺構出土縄文土器(3)
- 第19図 石器(1)
- 第20図 石器(2)
- 第21図 滑石製模造品
- 第22図 2区遺構出土遺物
- 第23図 3区遺構出土遺物(1)
- 第24図 3区遺構出土遺物(2)
- 第25図 3区遺構出土遺物(3)
- 第26図 4区遺構出土遺物

2区

図版1

1.2区全景 北から

2.2号土坑全景

3.3号土坑全景

4.4号土坑全景

5.1～3号溝全景

3区

図版2

表目次

- 表1 周辺の遺跡
- 表2 2区出土遺物観察表
- 表3 3区出土遺物観察表(1)
- 表4 3区出土遺物観察表(2)
- 表5 4区出土遺物観察表
- 表6 4区SK03出土具組成表
- 表7 5区SI06出土具組成表
- 表8 5区SI09・10出土具組成表
- 表9 出土具集計表

写真図版

1. 中央区3区全景航空写真

2. 調査区全景

図版3

1.SI11全景 北東から

2.SI11カマド近景 東から

3.SI12全景 南から

4.SI14全景 西から

5.SI14炉 近景 東から

6.SI15全景 西から

7.SI16遺物 南西から

8.SI17全景 西から

図版4

1.SI18全景 東から

2.SI19全景 南西から

3.SI20遺物出土状況 南から

4.SI20全景 南から

5.SI21全景 東から

6.3号溝セクション

7.SI25貯蔵穴遺物出土状況

8.SI25全景 西から 東から

図版5

1.SE1全景 北から

2.SK41全景

3.SK47全景 東から

4.SK48全景 北から

5.SK49全景 南から

6.SK50全景 東から

7.SK51全景 南から

8.SK52全景 北から

5.SK49全景 南から

図版6

1.SK54全景 北から

2.SK58全景 北西から

3.P1全景 東から

4.SD7～11全景 東から

5.SF1全景 西から

4区

図版7

1.4区空撮全景

2.4区完掘全景

図版8

1.SI1全景 北から

2.SI2全景 東から

3.SI2炉近景 北から

4.SI3全景

5.SI4全景

6.SI5全景 西から

7.SI6全景 西から

8.SI8全景

図版9

1.SI9

2.SI10全景

3.SI11全景 西から

4.SI12全景

5.SI13全景 東から

6.SI14焼土・炭化物出土 東から

7.SI14完掘全景 東から

8.SI14炉近景 南から

図版10

1.SI15全景 西から

2.SI15埋糞炉近景

3.SI16全景 西から

4.SI17全景 西から

5.SI18全景 西から

6.SI19全景 西から

7.SI20 西から

8.SI21全景 西から

図版11

1.SI20・22・23・SK3完掘全景 西から

2.SI24完掘全景 西から

3.SI25完掘全景 北から

4.SI26完掘全景 北から

5.SK2完掘全景 北西から

6.SK3完掘全景 東から

7.SF1セクション 東から

8.SD3セクション 西から

5区

図版12

1.5区空撮全景

2.遺構確認 東から

3.遺構確認 西から

4.SD1完掘

5.SF1セクション 北から

図版13

1.SF1 完堀

2.SI1 完堀 西より

3.SI2 完堀

4.SI3・4 SK1 完堀

5.SI6 完堀

図版 14

1.SI6・7 セクション 東より

2.SI7 完堀 西より

3.SI7 埋設土器出土 東より

4.SI9・10 完堀 北より

5.SI9・10 遺物 東より

図版 15

1.SI8・26・32・33 完堀 西より

2.SI9・10 セクション

3.SI11・12 完堀 西より

4.SI9～12 完堀 西より

5.SI5 埋甕炉 西より

図版 16

1.SI17 遺物出土 北西より

2.SI17 北西より

3.SI17・18 セクション 北西より

4.SI17・18 完堀 東より

5.SI18・18ibu 遺物出土 北西より

6.SI18 完堀 北西より

7.SI18 セクション 西より

8.SI19

図版 17

1.SI19 遺物出土 東より

2.SI19 完堀 西より

3.SI20・21・29 完堀 西より

4.SI23 完堀

5.SI22 完堀 西より

6.SI24 完堀 西より

7.SI25 セクション 北東より

8.SI25 遺物出土 西より

図版 18

1.SI25 完堀 西より

2.SI27 完堀 西より

3.SI28 完堀 西より

4.SI30 完堀 西より

5.SI31 完堀 北西より

6.SI33 セクション

7.SI33 遺物出土 西より

8.SI34 完堀 西より

図版 19

1.SI35 完堀 西より

2.SI13・SK1 セクション 西より

3.SK2 遺物 sy 都度 東より

4.SK3 セクション 北より

5.SI3・4・SK1 完堀 西より

6.SK8 遺物出土 南西より

7.SK11～13 セクション 東より

図版 20

2区 SI01 出土遺物

2区 SI02 出土遺物

2区 SI03 出土遺物

2区 SK02 出土遺物

2区 SK04 出土遺物

2区 SK10 出土遺物

図版 21

2区 SK16 出土遺物

2区 SK17 出土遺物

2区 SK18 出土遺物

2区 SK19 出土遺物

2区 SK34 出土遺物

2区 SK40 出土遺物

図版 22

2区遺構外出土遺物

図版 23

出土具 (1)

図版 24

出土具 (2)

第 1 章 調査に至る経緯と調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

1995（平成 7）年 2 月、新治村（当時）教育長宛に茨城県土浦土地改良事務所から、坂田地区において県営畑地帯総合土地改良事業を計画しており、その予定地内の埋蔵文化財の有無について照会が提出された。現地踏査を行なったところ、包蔵地、貝塚、古墳群の存在が確認され、試掘確認調査が必要である旨を回答した。2002（平成 14）年 8 月、茨城県土浦土地改良事務所から、埋蔵文化財の有無と遺跡が存在した場合の取扱についての照会が提出された。それを受け、同年 11 月に赤弥堂遺跡の北側について試掘・確認調査を行なった。結果、埋蔵文化財は確認されなかった。

2006 年、土浦市との合併後に計画が具体化し、6 月に現地踏査、2007（平成 19）年 2 月に赤弥堂遺跡の東側について、遺跡の範囲や密度、性格を把握するための確認調査を行なった。翌 2008（平成 20）年 3 月には、赤弥堂遺跡の西側から事業区域西端の坂田峯の台古墳群にかけて試掘確認調査を行なった。

試掘・確認調査の結果をもとに、茨城土浦土地改良事務所、土浦市産業部耕地課と協議を行ない、道路となる箇所について、記録保存のための発掘調査を行なうことで合意した。

2008 年 3 月 25 日、茨城県知事と土浦市長とで覚書を締結し、同年 7 月、茨城県知事と土浦市長で協定書を締結した。

文化財保護法関連では、2008 年 6 月 17 日付けで茨城県土浦土地改良事務所長より遺跡の発掘届（文化財保護法第 94 条）が市教育委員会に提出され、6 月 27 日付けで茨城県教育長宛に進達した。発掘調査は有限会社勾玉工房 M o g i が実施することとなり、埋蔵文化財発掘調査の通知（文保法第 9 2 条）を、8 月 25 日付けで茨城県教教育長宛に進達した。

第 2 節 調査の経緯

1 発掘調査

赤弥堂遺跡中央地区は、農免道路建設予定地が対象地となっているため、狭長となり、さらに枝分かれした形状となる。中央地区は、調査の工程上、便宜的にさらに 2～5 区の 4 区を分割設定し、2 区から順次調査を進めることにした。

平成 20 年 9 月 24 日、調査に先行して施設（テント・トイレ）設営と器材搬入を行い、実際の作業は 11 月 10 日から開始となった。

11 月期

（2 区） 10 日 表土排土作業を行う。

11 日 遺構確認作業を行い、各遺構の掘り下げ作業を開始する。竪穴住居跡は土層観察用ベルトを残し、土坑・ピットは半切して掘り下げる。

13 日（～ 14 日）各遺構の土層断面・遺物出土状況写真撮影を行う。

17 日（～ 18 日） 竪穴住居跡・土坑を主体とした土層断面図・遺物平面図の実測を行う。

20 日（～ 30 日） 竪穴住居跡・土坑・掘立柱建物跡を主体に完掘平面図の実測を行う。

（3 区） 17 日 表土排土作業を行う。

18 日 遺構確認作業を行い、各遺構掘り下げを開始する。

- 25日（～28日） 各遺構の土層断面写真撮影。遺物出土状況写真撮影及び遺物出土状況図の作成を行う。
- （4区）18日 表土排土作業を行う。
- 19日 遺構確認作業を行うとともに、各遺構の掘り下げを行う。

12月期

- （2区）1日（～6日） 各遺構の完掘写真及び完掘平面図の実測を行う。
- （3区）3日（～6日） 各遺構の土層断面写真撮影及び土層断面図実測を行う。
- 5日（～9日） 調査区全景写真撮影。各遺構の完掘全景写真撮影を行うとともに、完掘平面図の実測を行う。
- （4区）8日 遺構確認作業を行うとともに、各遺構の掘り下げ作業を行う。
- 13日（～25日） 各遺構の土層断面写真及び土層断面図実測を行う。
- 18日（～25日） 各遺構の完掘写真撮影及び完掘平面図の実測を行う。
- （5区）9日 遺構確認作業及び遺構掘り下げ作業を行う。
- 12日（～22日） 各遺構の土層断面写真及び土層断面図実測を行う。
- 19日（～25日） 各遺構の完掘全景写真撮影及び完掘平面図実測を行う。

平成20年12月26日、中央区全体の空撮撮影を行う。空撮実施後、土浦市教育委員会立ち会いのもと終了確認を行う。終了確認後、施設撤去、器材搬出を行い、現地における調査を終了。

平成21年1月4日（～6日）、埋め戻し作業を行い完了する。12月28日が終了日ですがいいですか？

2 整理作業

平成21年9月12日 水洗い作業を開始する。平行して図面の整理、写真の整理を開始する。

9月20日 水洗いが終了した遺物より、注記作業に取りかかる。

土器水洗い終了。貝の洗浄を開始する。

10月1日 注記作業を終了し、貝の洗浄が終了した分より任意サンプルを抽出し遺構別貝の計測作業 にとりかかる。

10月15日 出土遺物の分類作業を開始する。遺物の選別と並行し、台帳を作成する。

11月1日 遺物接合・実測・採拓を開始する。遺物分類に並行して、遺物原稿の執筆を開始する。

8日 遺構図面修正を開始する。平行して遺物のデジタルトレースを開始する。

2月22日 報告書の編集を完了し、印刷屋へ入稿する。

2月26日 初項原稿の校正を実施する。

3月9日 2校原稿校正を行う。

15日 報告書刊行。教育委員会に納品する。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図）

赤弥堂遺跡は、土浦市下坂田1,350－1外に所在する。これらの遺跡の所在する土浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置し、北部には筑波山塊から南東に伸びる新治台地、中央部は古鬼怒川により形成された桜川低地（現在の桜川流域）、東部には霞ヶ浦の土浦入り、南部は筑波稲敷台地から成り立っている。周辺市町村としては市域の北部は石岡市と接し、北部から東部にかけてかすみがうら市と接する。西部はつくば市、南部は牛久市や稲敷郡阿見町と接している。

今回調査が実施された赤弥堂遺跡は、桜川北岸の標高26～27mの新治台地上の縁辺に位置している。これらの遺跡がある坂田地区は、およそ常磐自動車の西側で国道125号の南側に広がる地域であり、市内でも有数な畑作地帯で、特に梨の栽培や花き栽培が盛んに行われている。細かく見れば坂田地区の東側が下坂田、西側が上坂田となる。下坂田の集落は台地下に集まり、上坂田の集落はおよそ台地上にまとまっている。

第2節 歴史的環境

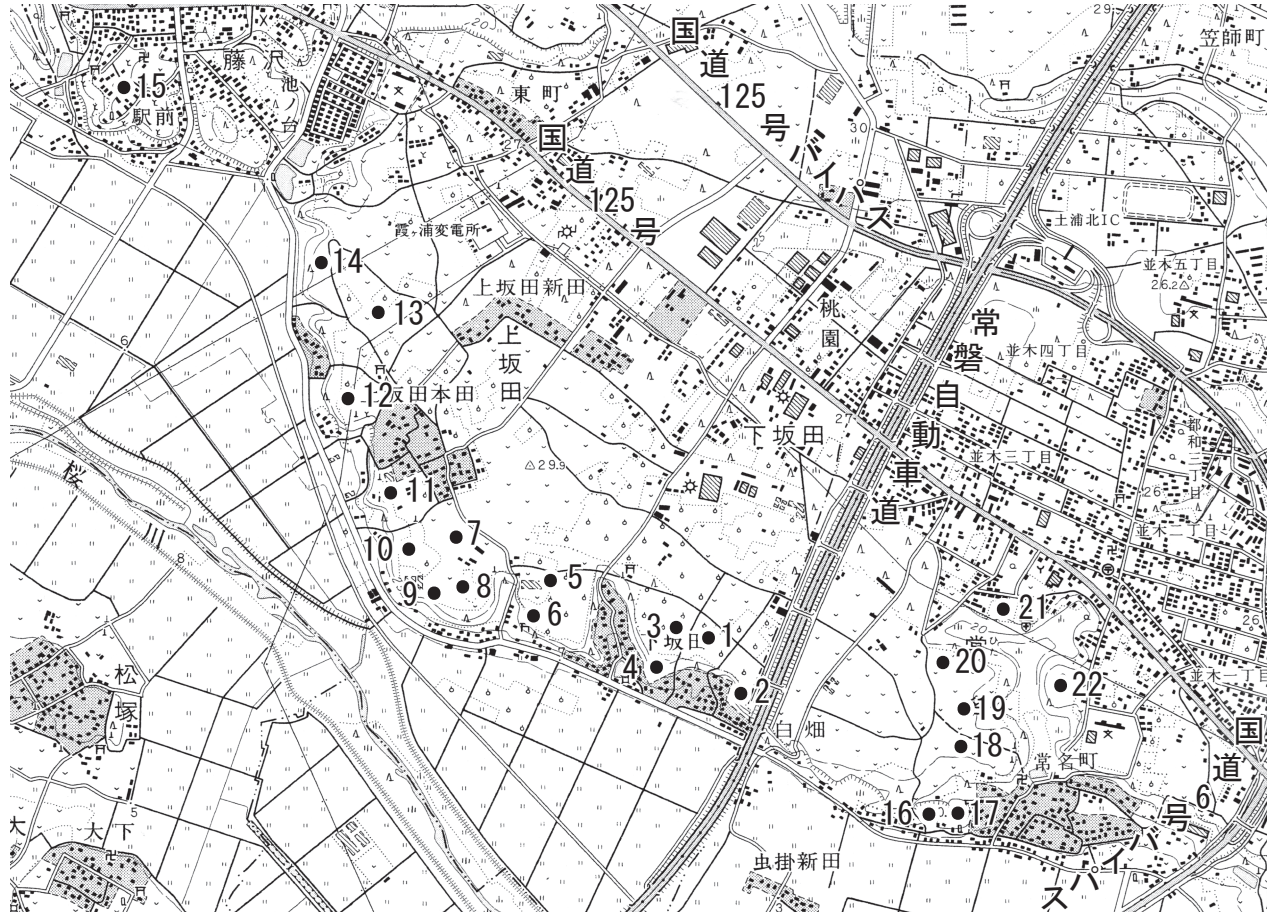
以下は、赤弥堂遺跡の周辺の遺跡で、試掘確認調査を含め調査のなされた遺跡を中心に取り上げ、時代順にその概要を述べてみたい。

旧石器時代 この時代の遺構が明確な遺跡は、山川古墳群（18）の第2次調査や神明遺跡（19）の第4次調査を除いて今のところない。特に前者では層位の異なる石器集中地点を3ヶ所確認した。これらの内、最も下層の石器集中地点からは台形様石器や楔形石器が出土し、周囲からは炉跡も確認された。同炉跡出土炭化物の年代測定を実施したところ、今から約3万2千年前のものであると測定された。市内でも最も古い石器集中地点の一例といえ、炉跡の確認と関連して興味深い事例といえる。

縄文時代 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡（1）、馬場先貝塚（3）、中台遺跡・中台貝塚（5）、下坂田塙台遺跡（9）、上坂田寺裏貝塚（11）、上坂田貝塚（14）、神明遺跡（19）がある。中台遺跡・中台貝塚や上坂田貝塚は、筑波大学により踏査や確認調査等が実施された。前者では地点貝塚が環状に巡る様子が指摘され、ヤマトシジミを主体とする後期（加曽利B式期）の貝層が確認された。後者ではハイガイを主体とする前期（関山式期）の住居跡内貝層が調査された。神明遺跡では数次にわたる調査で、中期（加曽利E式期）の集落跡の存在が明らかになっている。同遺跡では中期（加曽利E式期）の土坑からサルボウやハマグリを主体とする地点貝塚が確認された。馬場先貝塚、上坂田寺裏貝塚についても、ハイガイを主体とする前期（関山式期）の地点貝塚とされ、坂田地区の台地上に前期の地点貝塚が広く点在する様子が理解できる。このほか、坂田地区における集落遺跡の展開状況について、本事業に伴う平成18・19年度の試掘確認調査や平成20年度の赤弥堂遺跡東・中央区の発掘調査によりその輪郭が明らかにされつつある。それは、前期の地点貝塚の点在以外に、中期の集落跡が濃密に広く展開することが指摘できる。また、中台遺跡・中台貝塚では中期から後・晩期に及ぶ地点貝塚を伴う集落跡が広く展開するといえる。

弥生時代 この時代の遺跡としては、山川古墳群（18）の第3次調査で住居跡2軒と、北西原遺跡（20）の第2次調査で住居跡が1軒調査されている。本事業の試掘確認調査の結果では、赤弥堂遺跡（1）の西側や下坂田塙台遺跡（9）で僅かながら弥生土器片が採集されているのみである。坂田地区から常磐自動車を挟んだ常名地区にかけての台地上には、弥生時代の痕跡が非常に乏しいことが想定される。

古墳時代 この時代の遺跡は多く、特に古墳や古墳群の存在が特徴的であり、現状でも台地の縁辺に墳丘の



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代							備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	
1	赤弥堂遺跡		○		○	○	○		H14・18・19年度試掘確認調査
2	石橋古墳				○				
3	馬場先貝塚		○						H18年度試掘確認調査、旧下坂田鹿島前貝塚
4	釈迦久保古墳群				○				
5	中台遺跡・中台貝塚		○				○		H2年調査、H19年度試掘確認調査、旧下坂田貝塚
6	坂田台山古墳群				○				H19年度試掘確認調査
7	武者塚古墳群				○				S58年調査、市指定史跡
8	下坂田塙台遺跡				○	○			H19年度試掘確認調査
9	坂田塙台古墳群				○				H19年度試掘確認調査
10	峯台館跡						○		
11	上坂田寺裏貝塚		○						
12	坂田立野古墳群				○				
13	塚原古墳群				○				
14	上坂田貝塚		○						S56～57年調査、旧上坂田北部貝塚
15	藤沢城跡						○		
16	瓢箪塚古墳				○				湮滅
17	常名天神山古墳				○				H2年測量調査、市指定史跡
18	山川古墳群	○			○		○		H7・15年調査
19	神明遺跡	○	○				○		H9・13～15年調査
20	北西原遺跡・北西原古墳群				○				H5～7・14年調査
21	西谷津遺跡				○	○			H14年調査
22	弁才天遺跡				○	○			H8年調査、湮滅

残る古墳が比較的残り、古墳群を形成している。坂田地区には、石橋古墳（2）、釈迦久保古墳群（4）、坂田台山古墳群（6）、武者塚古墳群（7）、坂田塙台古墳群（9）、坂田立野古墳群（12）、塚原古墳群（13）があり、常名地区には常名天神山古墳（17）、過去に湮滅した瓢箪塚古墳（16）、山川古墳群（18）、北西原古墳群（20）が存在する。石橋古墳に近接する今回の赤弥堂遺跡東区の調査でも墳丘の削平された古墳が検出され、本来は古墳群として存在するものといえる。坂田台山古墳群は3基の古墳からなり、第1号墳は昭和39年に國學院大學と土浦第二高等学校により発掘調査が実施された。武者塚古墳群は2基の古墳からなり、この内の武者塚古墳は昭和58年に筑波大学によって発掘調査が実施され、特異な形態の石室を持つ終末期の古墳であることが判明した。出土品には銀製帯状金具や飾太刀、そしてみずらも発見され、現在県指定考古資料となり、古墳自体は市指定史跡となる。坂田塙台古墳群は合計13基の古墳で構成され、第2号墳は通称「武具八幡古墳」とも呼ばれ、安政元年に武具類が出土し、その遺物と状況を記した古文書が現在も地元に残されている。第11号墳は本古墳群内最大のもので、全長およそ30mを測る前方後円墳であり、平成20年に筑波大学によって測量調査がなされた。このほかにも、本事業に伴う試掘確認調査で墳丘が削平された古墳が多数確認されている。坂田立野古墳群は4基の古墳からなり、塚原古墳群は2基の古墳からなる。常名地区の常名天神山古墳は全長90mの前方後円墳で、5世紀初め頃の古墳と想定され、現在市指定史跡となる。その北側に広がる山川古墳群では3次にわたる調査で、33基もの古墳が確認され、前期から終末期の古墳が検出された。その中でも20基を越す大小様々な前期の方墳群の存在は特筆される。そして、同一台地上のより北側には北西原古墳群が存在し、終末期の方墳4基で構成される。

この時代の集落跡としては、赤弥堂遺跡（1）、中台遺跡（5）、神明遺跡（19）、北西原遺跡（20）、西谷津遺跡（21）、弁才天遺跡（22）で確認されている。特に北西原遺跡を中心にその周辺の神明遺跡では数次にわたる調査で、100軒以上もの前期の竪穴住居跡が検出された。西谷津遺跡や弁才天遺跡でも同時代の集落跡が検出され、前期や後期の竪穴住居跡が目立って確認されている。

奈良・平安時代 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡（1）、下坂田塙台遺跡（9）、西谷津遺跡（21）、弁才天遺跡（22）で確認され、竪穴住居跡によって集落跡が形成されている。遺構の時期が明確なのは西谷津遺跡や弁才天遺跡で、前者は8世紀前半から9世紀中葉まで継続する集落跡であり、後者では8世紀前半から9世紀後半までの竪穴住居跡60軒以上で構成される集落跡であることが確認され、掘立柱建物跡もまとまって検出された。弁才天遺跡は市内でも数少ない8世紀代の規模の大きな集落跡といえ、同期の多彩な出土遺物が出土している。出土遺物としては、銅製品として皇朝十二銭の一つである和同開珎、杏葉、帯飾りなどがあり、鉄製品としては匙や鋤先などが見られる。緑釉陶器や灰釉陶器も出土し、「億万」などと書かれた墨書土器も出土している。

中世以降 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡（1）、中台遺跡（5）、峯台館跡（10）、藤沢城跡（15）、山川古墳群（18）、神明遺跡（19）がある。赤弥堂遺跡や中台遺跡の試掘確認調査では性格不明の溝跡や大型の掘り込みが確認され、内耳土器などが出土している。峯台館跡は台地縁辺部を区切るように土塁が明瞭に巡り、その中に存在する坂田塙台古墳群第11号墳も土塁の一部として利用されている様子が窺える。坂田地区の台地北西端と谷を挟んだ対岸には藤沢城跡がある。その範囲は明瞭ではないが、現在の藤沢集落の多くを含むものと思われ、その中には一部土塁や堀跡が残る。常名地区では山川古墳群の第2・3次調査や神明遺跡の第1・3・4次調査の成果で、東西長125mで南北長103mの方形の溝で囲まれた方形館跡と考えられる遺構が確認されている。方形の区画溝内には掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡、竪穴状遺構などが検出され、遺物は少ないものの鎌倉時代の土師質土器小皿や竜泉窯系青磁の画花文碗や常滑産陶器片、銭貨が出土している。

このほか、近世が主体となる遺跡はないが、赤弥堂遺跡（1）、神明遺跡（25）などで溝跡や墓墳が確認されている。

参考文献

増田精一 編 1981『筑波古代地域史の研究―昭和 54 ～ 56 年度文部省特定研究費による調査研究概要―』筑波大学

新治村教育委員会 1986『図説 新治村史』

新治村教育委員会 1986『武者塚古墳』

前田 潮 編 1991『「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究―昭和 63 年度～平成 2 年度文部省特定研究経費による調査研究概要―』筑波大学

土浦市教育委員会 1998『神明遺跡（第 1 次・第 2 次調査）―土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 5 集―』

茨城県教育委員会 2001『茨城県遺跡地図』

土浦市教育委員会 2002『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第 5 次調査）―土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 6 集―』

土浦市教育委員会 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡（第 6 次調査） 神明遺跡（第 4 次調査）―土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 7 集―』

土浦市教育委員会 2004『山川古墳群（第 2 次調査）―土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 8 集―』

土浦市教育委員会 2007『山川古墳群（第 3 次調査）―土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 10 集―』

土浦市教育委員会 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡（第 5 次調査）―土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 4 集―』

第 3 章 調査の方法と標準堆積土層

第 1 節 調査の方法

発掘調査は、土浦市教育委員会において確認調査、並びに表土掘削作業が終了していたために、グリッド杭の打設並びに遺構確認精査作業より開始した。

グリッドは調査区域の形状が東西に長い道路幅であるために、道路の主軸方向に合わせて、任意の 5m グリッドを設定した。その呼称は南北方向に北から南に A・B・C・・・、東西方向は西から O・1・2・3・4・・・28 グリッドとした。調査終了後に任意杭の D1 及び D2 杭に座標を取り付け、D1 が X = 11501.230、Y = 31033.910、D2 が X = 11497.194、Y = 31036.850 とした。尚、基準の BM は E0 グリッド横に 26.802m で設定した後、調査区内に BM1 = 26.700m、BM2 = 26.800m、BM3 = 27.700m の 3 カ所を設定し測量の基準とした。

遺構調査は東側より開始し順次西へと調査を進めた。当初予想されていた遺構は縄文時代住居跡 6 基（内 3 基は貝塚）、古墳 2 基、古墳時代前期住居跡 1 軒、時期不明大形土坑 1 基、炉 1 基、溝 4 条、包含層 1 カ所であったが、精査の結果、縄文時代住居跡 5 軒（貝塚 3 基）、古墳時代住居跡 6 軒、方形周溝墓 1 基、古墳 2 基、溝 3 条、炉跡 3 基、土坑 14 基、小ピット 6 基、遺物包含層 1 カ所が検出され、遺構の数は土坑を中心に増加した。

各遺構は確認後に全体での写真撮影を行った後にセクション用のベルトを残して掘り下げを行った。セクション並びに遺構の実測は 20 分の 1 を基準に行った。

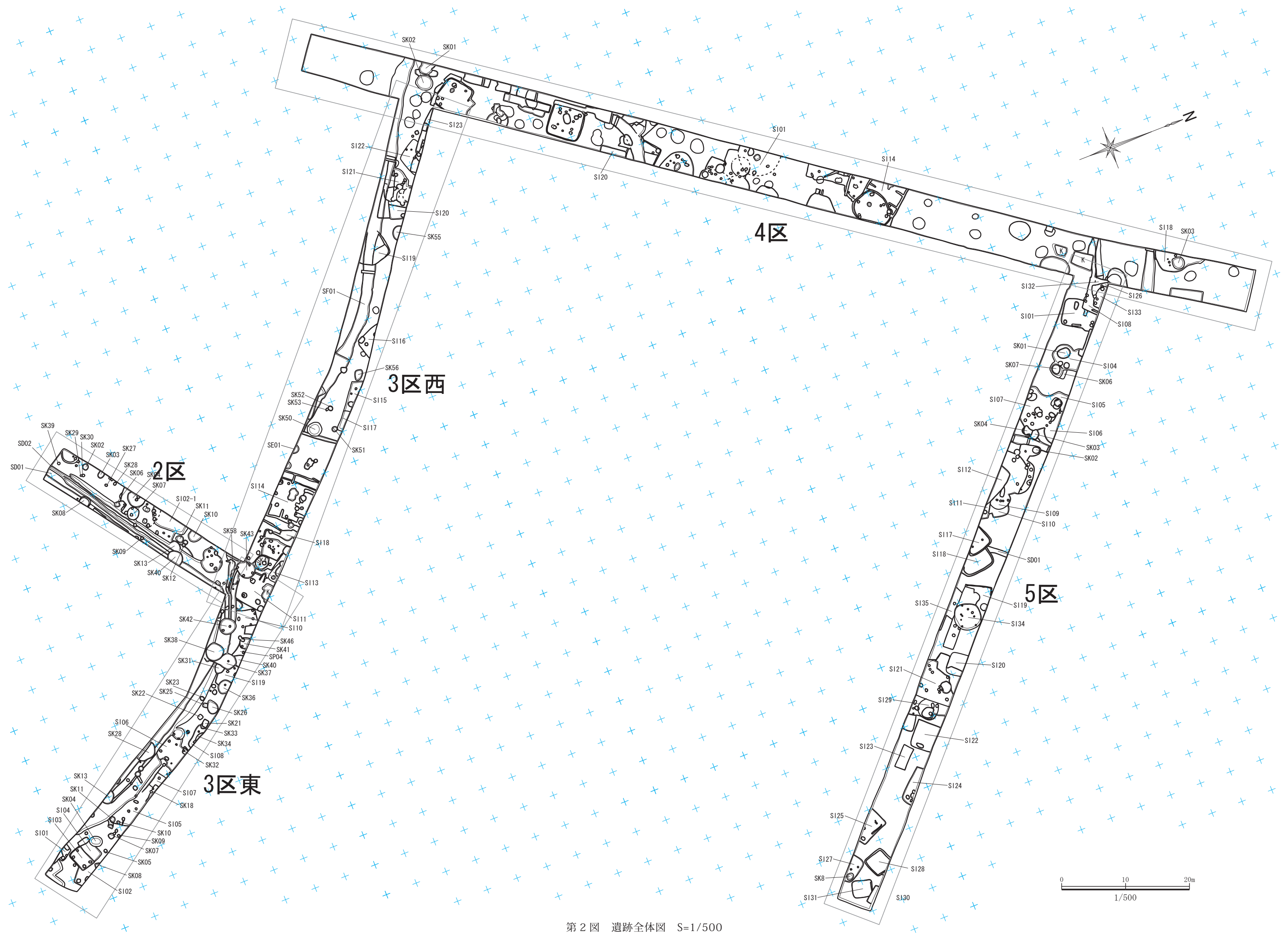
写真撮影は 35mm 白黒フィルム及びカラーリバーサルを用い行い、600 万画素のデジタルカメラでの記録撮影も平行して実施した。遺物の取り上げは、覆土中のものは一括で取り上げ、床面直上の遺物については記録した後に取り上げた。

貝層は当初コラムサンプル採取を予定したが、覆土中に廃棄された貝の総量が比較的少量と判断されたために全量採取を行うことにした。従って、遺構は貝を残して掘り下げを進め、住居内に廃棄された貝層の範囲を記録した後に貝の採取を行った。

調査終了全体図は 200 分の 1 で実測を行い、終了の全景写真はラジコンヘリコプターによる空撮を実施した。

第 2 節 標準堆積土層

本遺跡の標準堆積土層は調査区の中央やや東よりの C22 グリッド調査区域南側壁部分で行った。基本的な層序は全域にわたりほぼ同様で、表土層の下に旧耕作土層が確認され、その直下に第Ⅲ層ローム漸移層が確認されこの土層が遺構確認面となっている。第Ⅳ層のソフトロームまでの厚さはおよそ 20cm を測る。以下Ⅴ層ハードローム層は締まりの状況及び色調から a ～ d まで 4 層に細分される。



第2図 遺跡全体図 S=1/500

第4章 出土した遺物

第1節 縄文土器

出土した遺物は整理箱に250箱を数え、このうちおよそ90箱が土器資料であった。前年度に報告した赤弥堂遺跡（東地区）に比べ2倍近い資料の出土がある。その中心となるのが縄文時代中期の遺物である。

遺物の出土地点は住居跡からのものも多くあるが、袋状土坑からの出土量が圧倒的に凌駕している。縄文中期の遺物は、大木8a式、勝坂式、の影響を受ける阿玉台式土器、広義の中峠式、加曽利E式の資料が多く出土しており、特に中期後半阿玉台Ⅳ式から加曽利EⅠ式にかかる資料が中心となる。

第1項 2区住居跡出土遺物

SI03

SI03-01は6単位波状口縁のキャリパー型深鉢である胴部の2分の1及び底部を欠損するが、おおむね器形を把握できる資料である。把手部を基点に窓枠状の区画を設け、内部にやや崩れた交互刺突による沈線が1条横走る。頸部文様帯には隆線による波状の文様が貼り付けられる。胴部地文には単節RLの縄文が縦方向に回転施文した後、縦方向の直線と波状の沈線が懸垂する。口縁部文様帯の形状は窓枠内に結節沈線紋による鋸歯文を充填する阿玉台的な手法を取るものであるが、充填される鋸歯文は交互刺突列に置き換えられるものであり広義の中峠式の要素と判断できる、頸部以下は加曽利EⅠ式段階の要素を合わせ持つ。

SI03-2はキャリパー型の大型深鉢である。口縁は緩やかに内湾するもので内面に段を有す。口縁部は一部分のみで、明瞭ではないが把手部が付されていたものであろうか、平縁の端部はやや上方に湾曲する。頸部の文様帯は隆帯により区画された内部に口縁から連結するクランク状の隆帯が垂下する。また、内部には太い沈線が縦位に充填される。胴部は単節RLの縄文を整然と縦方向に回転施文し、3条1単位の沈線と1条の蛇行沈線が懸垂する。加曽利EⅠ式である。

SI03-3は胴上半部から口縁部の資料である。キャリパー型の深鉢である。口縁部文様帯は頸部に巡る隆帯によって区画される。区画内には東大橋原遺跡類例に見られるような縦区画の貼り付け文が描かれる。褶曲文の1種であろうか、頸部は無文となり、胴部との境には隆帯が1条巡る。下半は欠損しているが僅かながら単節縄文が観察される。加曽利EⅠ式と判断される。

SI03 - 4 - 1は大型の浅鉢である。内面に段を有し、口縁は外反気味に開き端部は面取られるように平坦になる。胴部は緩やかに内湾する。底部は欠損する。内面の整形は丁寧に磨かれる。

SI03-04－2は浅鉢の底部である。当初4－1の資料と同一の可能性を考えたが、胴部の湾曲と推定口径から前者よりやや小さくなることから別固体と判断した。底部は平底で体部はやや湾曲が強い。

SI03 - 5は深鉢の口縁把手部の大破片である。中央に円環状の孔がうがたれ、その上に三叉文が刻まれる。口縁部文様帯には隆帯による剣先文が描かれ、地文には単節LRの縄文が充填されている。頸部には隆帯が巡り胴部と区画する。胴部にも単節LRの縄文が施文されている。三叉文の要素は勝坂式で、頸部の文様構成は加曽利EⅠ式である。

SI03-6は深鉢口縁部把手部の破片である。円環状の組み合わせによる中空の大型把手部である。口縁部文様帯には隆帯による曲線文様が描かれる。空白部には単節LRの縄文が充填される。大木式の要素が見られる資料である。

SI03-7は頸部から胴部にかけての屈曲部の資料である。眼鏡状の突起が付されキャタピラ状の連続刺突文が全体に刻まれる。勝坂式土器であろう。

SI03-8・9は胴下半から底部の資料である。何れも単節縄文を地文に有し、蛇行懸垂文が描かれる。加曽利EⅠ式と判断される。

SI03－10は底部の破片である。胴下半は無文で底部に網代痕が付される。

SI03-11は胴部の破片である。無節Rの縄文を縦方向に施文し、横方向の波状沈線が描かれる。加曽利EⅠ式と判断した。

SI03-16~19は土器片鍾である。小振りの18、平底で紐掛側が長くなる16・19のタイプが見られる。重量は16が17.5gで最も重く、17は10.9g、18は10.5g、19は10.3gである。

第2項 2区土坑出土遺物

SK02

SK02-1は土器片鍾である。中期の土器が素材に用いられる。重量は28.9gとやや大型のものである。

SK10

SK10-1は鉢形の土器である。口縁部から体部にかけての資料である。口縁部は平縁で小波状の双頭の突起が付される。単位は不明。低い隆帯により窓枠状の区画が設けられる。胴部は単節RLの縄を斜め45度に回転施文し縦方向の節になる。口縁内面には段を有するもので、胎土中の雲母の混入も目立つ。阿玉台式最終末の様相を呈する土器である。

SK10-02は朝顔型に開く深鉢である。口縁部は折り返し段を有す。内面の段は観察されない。胴部には単節RLの縄文が全面に施文されその他の文様はない。胎土中に雲母の混入が見られ、朝顔型に開く形状から阿玉台最終末から中峠式の段階の資料と考えられる。

SK10-03は深鉢の口縁部破片である。口縁は折り返し口縁になり、口縁部から胴上半部にかけて二重隆線によるS字状の文様が描かれる。隆帯上には縄文が回転施文され、隆帯に沿ってキャタピラ状の角押列が沿うように描かれる。また、地文に単節RLの縄文が施文された後、波状の沈線が3条垂下する。二重隆線の内部にも鋸歯状の有節沈線が加わる。阿玉台最終末の段階であろう。

SK10－4は外反気味に開く口縁部の破片である。内面に段を有するもので、平底の浅鉢と判断される。口縁部外面には連続して指頭による圧痕が施され、襷状を呈する。胎土中に雲母の混入が目立つことから、阿玉台段階と判断される。

SK10－5は土器片鍾である。やや方形に近いが周縁の整形は殆ど行われない。紐かけ部分の刻みのみである。重量は10.8gである。

SK10-12は繊維を混入する口縁部の土器片である。末端環付のLR縄文を施文するもので、関山2式段階と判断される。本遺構の遺物としては混入品と判断される。

SK17

SK17-1は口縁部の破片で、「く」の字に屈曲した後に外反して開く浅鉢の口縁部と思われる。胴部から底部にかけては欠損する。胴部の屈曲部に巡る隆帯上には、棒状の工具による刺突が加わる。内面の段は明瞭ではない。阿玉台最終末から加曽利EⅠ式にかかる資料であろう。

SK18

SK18-1は深鉢胴部下半の資料である。下端部を除き胴部には単節RLの縄文が全面に施文される。懸垂文は

見られない。

SK18-2 は土器片錘である。中期の土器片を使用する。重量は 5.7g とやや軽い。

SK40

SK40-1 は円柱状の胴部が径部で僅かながらふくらみをもって開く朝顔型に近い形状である口縁部は折りかえされている。ほぼ完形である。内外面共に無文である。広義の中峠式の範疇でとらえたい。

SK40-2 は円孔が穿たれる大型の把手が 1 箇所が付される。孔の周縁にはキャタピラ状の刺突列が施される。頸部文様帯には刺突列が 2 条巡っている。以下胴部は無文である。刺突列の状況から判断して勝坂式と判断した。

SK40-03 は折り返し口縁の深鉢口縁部である。胴部には 4 単位の波状の条線が粗雑に垂下する。阿玉台Ⅳ式の遺物であろう。条線を地文に有する資料は阿玉台式土器段階から知られており、本遺物は、文様から加曾利 E 1 式段階には含まれない遺物と判断している。

SK40-06・07 は土器片錘である。

第 3 項 2 区遺構外出土遺物

各遺構並びに確認面から出土した遺物であるが、遺構の時期と明らかに異なる遺物について、遺構外遺物としてまとめた。

SI03-17・SK40-16・SK40-19 は条痕を施す広義の茅山式土器である。いずれも胴部の細片で胎土中には繊維を混入している。条痕の状況から鶉ヶ島式の可能性がある。SK40-16 では内面の条痕は見られず、胎土中の繊維混入量は微量である。

SK10-07 は深鉢口縁部の破片である。態度中には繊維を多量に含む。平縁の口縁で鋸歯状の突起が刻まれる。口縁部文様帯には平行沈線に梯子状の刻みを施すもので乳状の突起が付される。関山 1 式古段階の土器である。

SK10-11 は 07 同様に地文にループ文を施文した後、口唇部に鋸歯状の突起が刻まれる。

SK10-05・SK10-07 は深鉢口縁部の破片。口縁部直下に多段のループ文が施文される。関山 1 式の新段階であろう。やはり繊維の混入は多い。

SK40-10 は双頭の波状突起部分の片側の破片である。地文に縄文を施文後、平行沈線による文様が粗雑に描かれる。胎土中の繊維は多い。関山 2 式と判断される。

確認面 08・09 は組紐を施文する土器である。08 は片口部の破片である。口縁部の一端を外側に折り返し広げている。全面に組紐が全面に回転施文される。胎土中の繊維は多い。09 は外反する胴部の破片で、条線によるコンパス文様が描かれる関山 2 式に比定される。

SK10-12 は口縁部の破片である。口唇部は薄く尖る。外面には複々節の LRL 縄文がまばらに施文される。胎土中の繊維混入量は多い。関山 2 式と判断される。

SK02-13 は口唇部の細片である角頭状の断面で胎土中に雲母の混入が顕著である。阿玉台式土器である。

SI02-14 は口縁部が折り返し隆帯になり、上部に RL の縄文が施文される。阿玉台Ⅳ式である。

D02 - 02 は深鉢形を呈し、口縁は緩やかに外反して開く。内面に段を有し、口縁部に S 字の隆帯を横方向に添付するもので、隆帯に沿って角押列が施文される。地文には条線が施文される。阿玉台Ⅳ式または広義の中峠式であろう。大木 8 a 式の影響を受けるものである。

2F18-23 はキャリパー型深鉢の口縁部代破片である。平縁で口縁部には隆帯がめぐり隆帯上には刻みが施される。この隆帯から頸部は連結する同様の隆帯により窓枠状の区画が設けられ、内部に交互刺突列が隆帯に

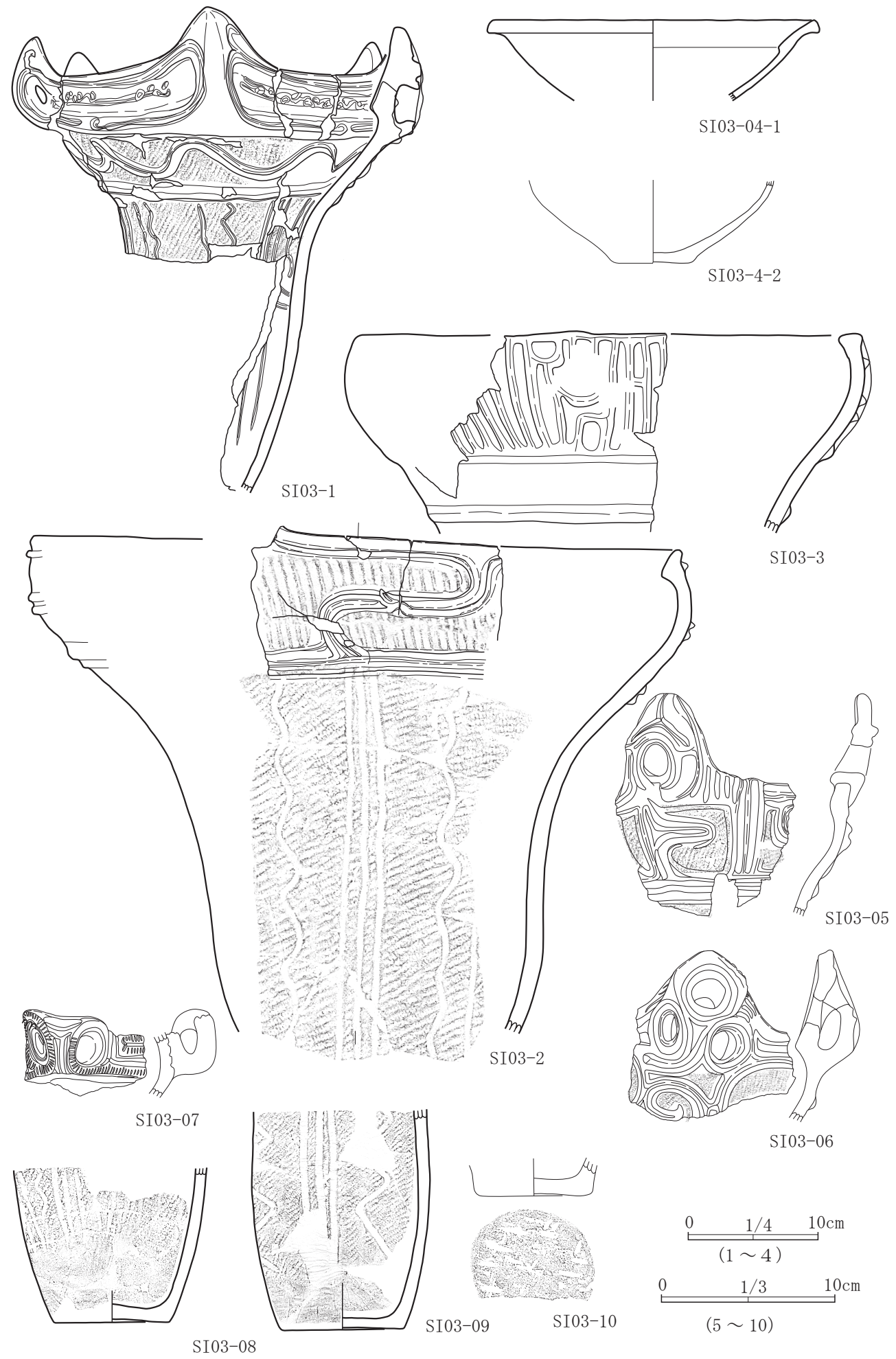
沿って描かれる。また中央部分には横走る刺突列が 1 条加わる。広義の中峠式と判断される。

SK19—03 は外反して開く深鉢の口縁部破片である。口縁部は屈曲して外に開く。この口縁部が文様帯となっており、端部に刻み、内側には交互刺突列が施される。頸部は単節 LR の縄文がやや粗雑に施文される。胴部の屈曲部には 3 条の沈線が巡り、以下は破損して不明であるが、沈線による文様が描かれるようである。形状より広義の中峠式に比定されるものであろう。

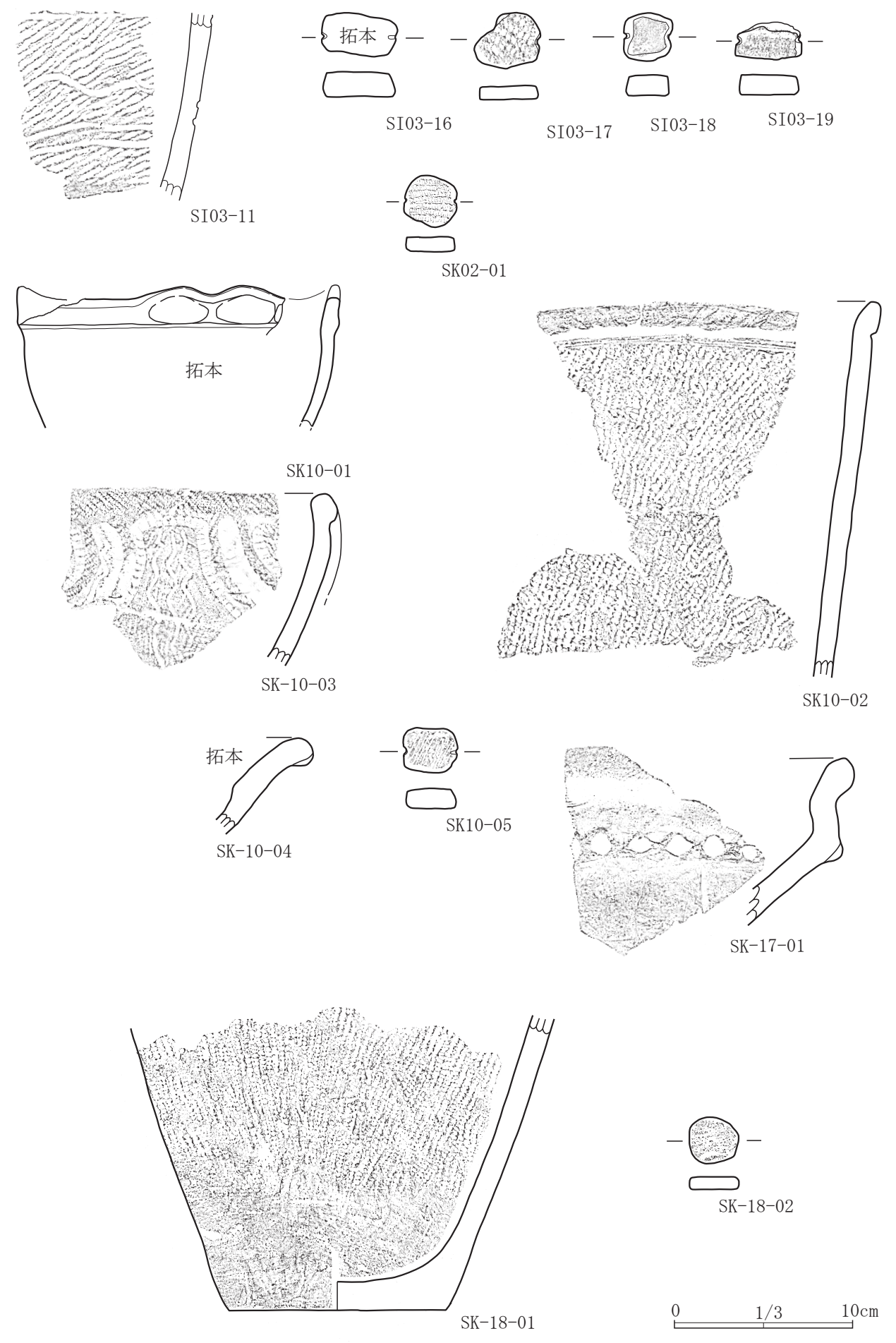
SF-18 は浅鉢と思われる口縁部の大は片である。屈曲する口縁直下に窓枠状の区画を設け、内面に交互刺突によるクランク文様がめぐらされる。口縁の内面に段を有するもので、広義の中峠式と判断されるが、隆帯による渦巻きの連結文は加曾利 E 1 式の特徴を持つ。

SK04-04 は鉢形の土器である口縁部の破片で、ない外面とも粗雑なつくりである。外面にはヘラで削ったような痕跡が残される。胎土焼成から中期の異物と判断されるが形式は不明。

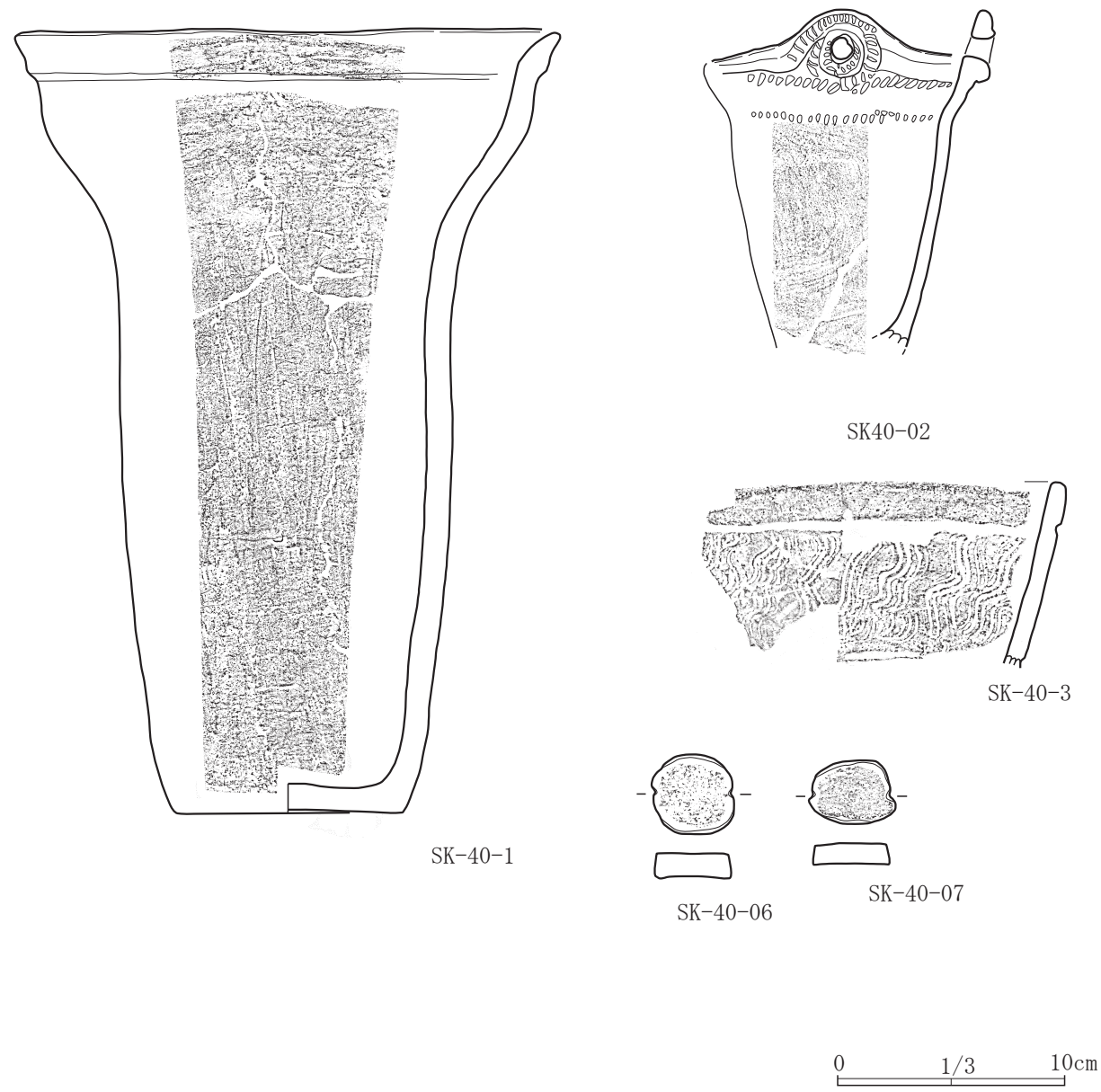
SK40-4 は内湾する波状口縁の波頂部の破片である。外面には口唇に沿って刻みを有する平行沈線がめぐり、胴部上半には弧線による区画帯が設けられ単節縄文が充填される。後期加曾利 B3 段階の資料である。



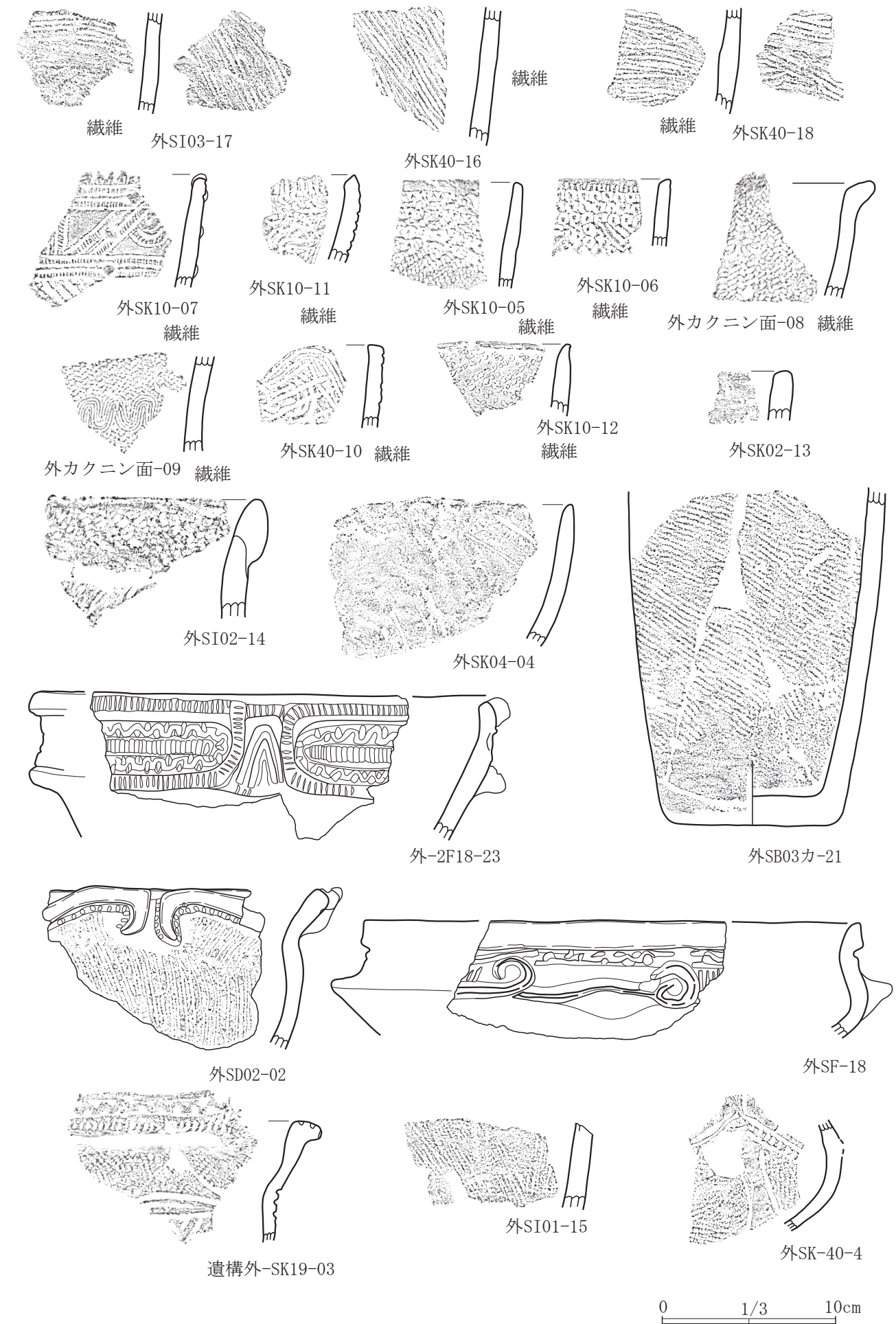
第3図 2区遺構出土縄文土器(1)



第4図 2区遺構出土縄文土器(2)



第5図 2区遺構出土縄文土器(3)



第6図 2区遺構外出土縄文土器

第4項 3区遺構出土遺物

2B7-2B8（SK）

2B7-2B8-1はキャリパー型の胴上半から口縁部にかけての資料である。大波状の口縁部で波頂部は欠損している。口縁及び頸部に巡らされた刻みを有する隆帯によって、窓枠状の区画体が設けられ、波頂部の直下には円環状の貼付文が付され頸部の流体に連結される。逆T字の文様構成を意識している。枠状区画内には波状の沈線が多状に充填される。胴部の地文は縦方向の条線が密に施文される。これらの特徴より阿玉台Ⅳ式と判断される。

SI03

SI03-01は波状口縁の深鉢型土器の大破片である。2点出土して接合したが復元には至っていない。1a文様帯が狭く、円形の貫通しない孔が2個一対双頭の波頂部に描かれる。1b文様帯には無文部となるが、波頂部から沈線により2文様帯の胴部に巡る沈線に連結している。2文洋帯は地文に器細かな単節縄文を施文した後、沈線により斜方向に開く沈線が逆U字状に描かれる。中央部分に蕨手文は加えられない。壁は薄く、口縁から誰何するY字状の沈線などの特徴から、南三十稲場新段階式と判断される。同様の資料の管見に触れたもので関東地域では、少数存在するが正式報告例が少ないが、南関東出土の南三十稲場式土器の研究では阿部芳郎氏の論考がある。

SI03-02・03は土器片錘である。02は12.8g、03は10gである。

SI06

SI06-07・08は土器片錘である。07は14g、08は10.5gである。

SI21

SI21-01は深鉢型土器の胴部破片である。単節RLの縄文を縦施文し、幅はやや狭い擦り消し懸垂文が垂下している。加曾利EⅡ段階の遺物である。

SI21-02は単節RLの縄文式土器を胴部に施文する深鉢の破片である。沈線により区画される頸部には無文帯が観察される。加曾利EⅡ古段階に比定されるものであろう。

SI21-03は深鉢胴部片である。単節縄文を地文にやや太い沈線による曲線文様が描かれている。加曾利EⅠ新段階の遺物と考えられる。

SI21-04は深鉢胴部の破片で、条線を地文とする資料である。阿玉台式土器に見られる条線とはやや異なり丁寧な条線で引かれている。加曾利EⅣ段階の資料と考えられる。

SI21-05は内傾する深鉢口縁部の破片である。口縁部に無文帯を設け、直下に沈線が1条巡る。以下は縦方向の条線が描かれる。加曾利EⅣ式の遺物である。

SI21-06は土器片錘である。周縁の整形はほとんど行われず、打ち欠いたのみのもので、僅かに紐掛けの刻みが施される。重量は8.8gである。

SI23

SI23-01は土器片錘である。周縁の整形はほとんど行われず、打ち欠いたのみのもので、僅かに紐掛けの刻みが施される。重量は17.5gである。

SI24

SI24-01はキャリパー型の大形の深鉢である。口縁部及び底部は欠損する。頸部の無文帯は観察されない。全面にLRの単節縄文が施文されている。加曾利EⅠ式と判断される。

SI24-02は底部の資料である。胴部下端を除き単節縄文が施文され、1本の太い沈線が垂下している。加曾

利EⅠ新段階またはEⅡ式と判断される。

SI24-03二重隆線によって区画が設けられ区画内には単節縄文が充填される。縦区画の内部に渦巻きが描かれるならば加曾利EⅡ式と判断される、クランク文様ならば、EⅠ式の資料であろう。口縁部直下の頸部にも縄文が施文されている。

SI24-04はほぼ直立する深鉢口縁部の破片である。端部は丸くなる。器面には縦方向の粗い条腺が乱雑に施文されるもので、加曾利E式でも待つ段階の可能性が想定される。形式不明。

SI24-05は大きく開く底部の破片である。器形より深鉢ではなく鉢型の土器の可能性がある。下端付近にまで単節縄文が施文されており、浅鉢とは異なる。加曾利E4の可能性がある。

SI24-06・07・08・09・10・11・12・13は土器片錘である。06では縦方向の磨り消し懸垂文が観察され、加曾利EⅢ式の遺物を素材にしている。重量は9.2g、07は4.6g、

SI31-01は胴部下半から底部の資料である。単節縄文が施文された後幅の狭い2本の沈線が懸垂する。加曾利EⅡ段階の資料であろう。

SK34

SK34-01は深鉢の完形品である。胴下半にやや膨らみをもつものの、口縁部は外反気味に大きく開く。口縁内面に僅かに段を有すもので、外面はRLの縄文が密に施文されるのみで、文様はない。加曾利EⅠ式段階と判断される。

SK37

SK37-01は3単位の大波状口縁の深鉢である。三角形の波状部には隆帯による区画がなされるが内部に文様は施されていない。口縁部文様帯は頸部に巡る隆帯によって区画されるもので、内部には波状の隆帯が横位に全周する。胎土焼成などから勝坂的な様相を感じさせるが、加曾利EⅠ段階として捉えておきたい。

SK37-02は底部の資料である。胴部はやや内湾気味に立つ。加曾利EⅠ式と判断される。

SK38

SK38-01は把手部分の資料である。波頂部を起点とする隆帯は円環状の区画を作った後、口縁部にX字状の区画体を作り出している。隆帯上には刻みが施され、区画内には浅い沈線が円環の中で3条、横帯区画の中には2～3条の沈線が緩やかな曲線状に充填される。阿玉台Ⅳ式に比定される。

SK38-02は大きく屈曲する浅鉢型土器の口縁部大破片である。無文である。加曾利EⅠ古段階の資料と判断される。内面に阿玉台式特有の段は有さない。

SK38-03は深鉢胴部の破片である。

SK38-04は深鉢の胴部資料で、上半及び下半から底部にかけては欠損している。

SK38-05は直立する頸部で口縁が水平に開く土器である。平縁で双頭の小突起が付される。頸部には縦方向の太い沈線が密に描かれる。小美玉市（旧玉里村）田木谷遺跡に類似例があるが同遺跡出土遺物には交互刺突文が加わるもので広義の中峠式として捉えている。ここでも中峠式としておく。

SK38-06は大波状の口縁となる深鉢の口縁部破片であろう。口唇部及び口辺直下には庇状の隆帯が張り付けられ口縁部は平坦になる。口唇部には刻みが2列端部に連続して刻まれ、中間に沈線が1条巡る。口辺の隆帯上にも同様の刻みが施される。勝坂式または中峠式と判断される。

SK38-08深鉢の口縁部破片である口縁は屈曲して内面に段を有す。屈曲部は隆帯状になり和久状区画絵と連結される。区画内は単節縄文が施文され、さらに平行沈線がこの隆帯の縁に沿って描かれる。また胴部にも平行沈線による逆U字状の文様が描かれる。阿玉台Ⅳ式と判断される。

SK38-12 は波状口縁の把手部の破片である。やや小振りの団扇状の把手で上面には半截竹管の端部を連続して刺突し、弧状の線を2重に描く。有節沈線の文様に似るが明らかに異なる。勝坂式に見られる刺突文庸の手法に近い。扇状の把手から垂下する隆帯並びに口唇端部には刻みが施される。阿玉台Ⅳ式の範疇で捉えたい。

SK38-13 は深鉢口縁部の資料である。ほぼ直線的に開く器形である。

SK40

SK40-01 はキャリパー型の口縁部細片である。口縁には二重隆線が巡り、クランク文様が口縁部文様帯に描かれるものであろう。加曾利 E I 式新段階の遺物と判断される。

SK40-02 は深鉢型土器の胴部屈曲部付近の破片である。横帯に区画された3条の沈線の間には刺突列が加わる。交互刺突にはならない。以下は3本の沈線が懸垂する。地文には単節 LR の縄文が施文されている。加曾利 E I 段階の遺物と判断される。

SK41

SK41-01 はキャリパー型の土器の上半部大形破片である。口縁部文様泰には二重隆線によって剣先文横 S 字の文様が描かれる。頸部には太い隆帯が1条巡り以下は3条1単位の懸垂文が施文される。地文は RL の単節縄文である。加曾利 E I 式中段階であらう。

SK41-03 は 01 と同様の文様構成を行うものであるが、口縁はやや外反気味に開き形状は異なる。懸垂文も2本の沈線で頸部を区画する隆帯もやや細くなる。加曾利 E I 新段階に考えたい。

SK41-04 は 03 と同様の口縁部の破片である。同一個体の可能性がある。

SK41-05 は胴部の破片である中段に細い隆線が付されている。03 の胴部破片の可能性がある。

SK41-06 は深鉢の胴部破片である。貝殻復縁の背面を持ち手連続刺突を行うもので、興津式の可能性がある。細片の為に詳細は不明。

SK47

SK47-01 はキャリパー型の深鉢である。底部を欠損するものの、ほぼ器形が分かる。口縁部には隆帯による横帯の窓枠状の区画を設ける。隆帯は4単位の渦巻きが配される。窓枠状の区画内には単節 RL の縄文が全面に充填される。胴部は頸部まで RL の縄文が縦方向の回転で施文され、2条1単位の沈線による懸垂文が垂下する。加曾利 E2 式新段階の遺物である。

SK47-03 は波状口縁の波頂部の破片である。口縁部は無文の隆帯状になり太い沈線が垂下する地文は単節 RL を縦方向に施文する。加曾利 E II 段階の土器と判断される。

SK47-04 は胴部が大きく張る深鉢の胴部下半から底部の資料である。底部付近を除き全体に RL の単節縄文が施文されている。加曾利 E II 式。

SK47-05 キャリパー型土器の口縁部破片である。太い沈線により口縁直下に窓枠状の区画及び渦巻き文を描くもので、地文には LR の縄文が施文されている。加曾利 E II 新段階からⅢの古段階になる遺物である。

SK47-06 は 05 と同一個体と考えられる破片で、文様構成では横方向の蕨文の間に円形の区画を充填させている。区画内の縄文は RL の単節である。加曾利 E II 式新段階からⅢ式の古段階の遺物と判断した。

SK50

SK50-01 は胴部下半が円筒状で胴上半部は屈曲してやや開いて立つ。完形品である。口縁は折り返えす。胴部には縦方向の5本1単位の条線が粗雑に施文されるもので、阿玉台4式段階と判断される。従来、条線を有する土器が阿玉台式土器に供伴することは知られていたが、器形がわかる資料としては希有の遺物である。胎土中には雲母の混入が顕著で、概期の特徴を示す。口縁内面の段は消滅している。

SK50-02 は胴部の破片である。

SK58

SK58-02 は胴部の屈曲が少ないバケツ型の深鉢である。ほぼ完形で、口縁部は丸みを帯びる。無文である。形状から阿玉台Ⅳ式から広義の中峠式にかかわる土器の可能性がある。

SK58-03 は外反して大きく開く大形の深鉢胴部資料である。頸部付近に1条の低い断面蒲鉾状の隆帯が1条巡る。やはり形状から阿玉台Ⅳ式から広義の中峠式にかかわる土器の可能性がある。

第5項　3区構外出土遺物

遺構外3区 E－1 はキャリパー型の土器である。大波状口縁になるものであろう。罎状の隆帯により窓枠状に区画された内部に、眼鏡状の把手を中心に玉抱き三叉文を意識して文様が描かれ、縁辺部には交互刺突のクランク文と幅広の工具による押し引きが施される。内部には三叉文様が充填される。口唇部及び罎の端部には刻みが施され、文様的には玉抱き三叉文の特徴から、勝坂式の影響を感じさせる。頸部は無文帯となっている。

E－2 は大波状口縁の波状部の破片である。罎状の隆帯により区画され方形に近い突起で、中心部から太い隆帯が垂下し、罎部に連結されて窓枠状の文様が構成される。内部には幅広の工具による角押文が隆帯に沿ってめぐり、内部には薄く有節沈線が充填されている。頸部は無文である。

J－1 は胴部の破片である。胴部に隆帯が1条巡る。隆帯に沿って幅広の角押文が施文される。地門には縦方向の条線が施文される。阿玉台式と判断される。しかしながら、胴部の隆帯に沿ってキャタピラ門に近い角押列が配される点は、勝坂式の影響を考えたい。

SK42－1 は胎土中に繊維を混入する土器である。平ふちの口縁部で鋸歯状の突起が付される。口縁部の文様帯には平行沈線による鋸歯文が描かれる。以下は末端ループの LR 縄文が多段に施文される。関山2式土器と判断される。

外-16 は態度中に繊維を混入する土器で、深鉢の口縁部破片である。口縁直下には組紐による回転施文が行われる。関山2式である。

外-17 は内湾する口縁部の破片で口縁部直下にキャタピラ状の刺突文による波状文が2条巡る。勝坂式土器と思われる。

外 18 は波状を呈する深鉢の波状部口縁の破片である。口唇部には刻み目が施され、コンパス文が1条巡る地文には単節 RL の縄文が横回転で規則正しく施文され、下端にはループ文が見られる。関山2式である。

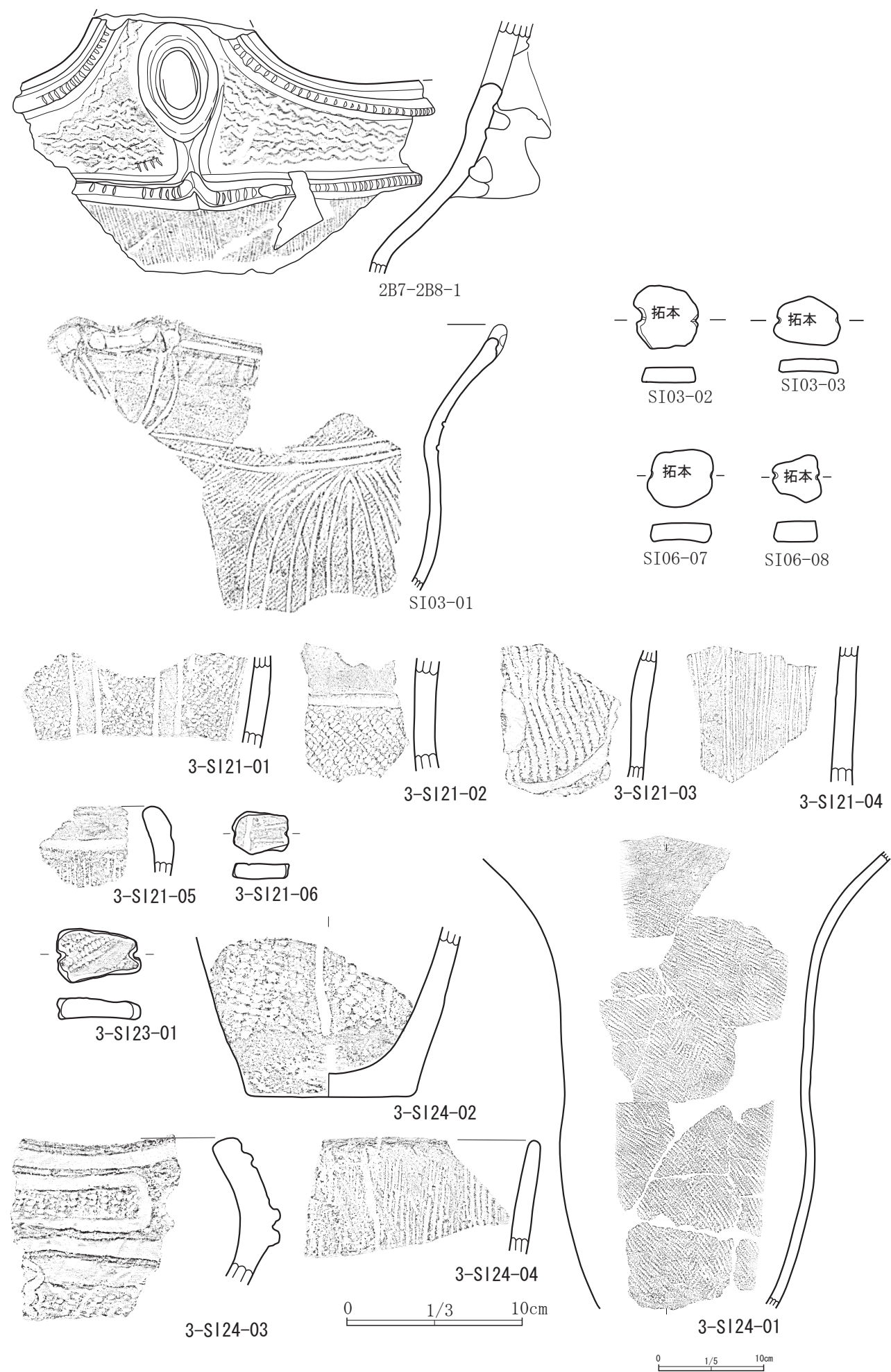
外 19 は胎土中に繊維を混入する土器でやや方形を呈する底部の破片である。上げ底状で体部には LR も縄文が密に施文される。関山式土器である。

外 20 は胎土中に繊維を混入し、単節縄文による羽根状を構成する深鉢胴部の破片である。関山式土器である。

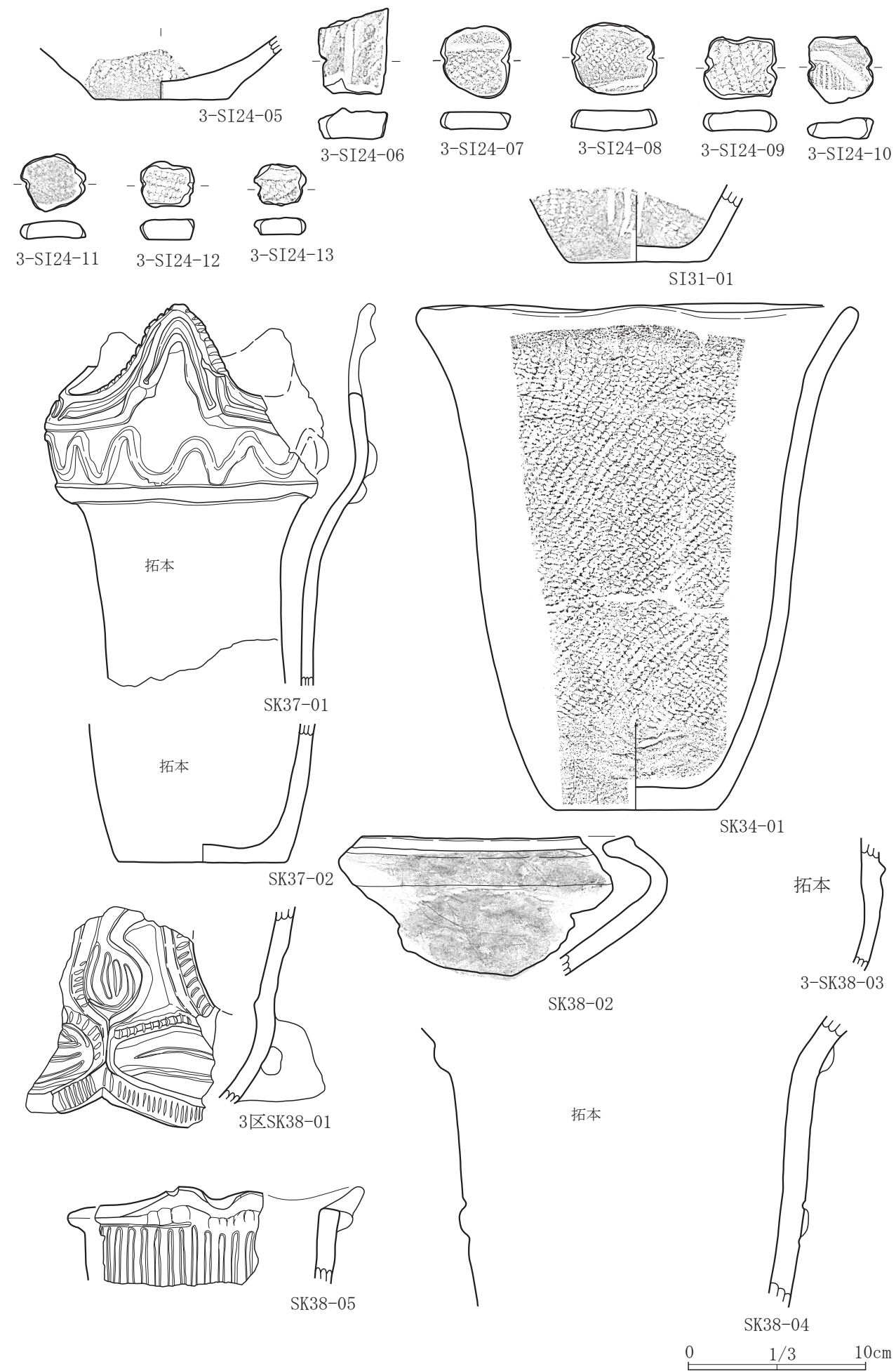
外 21 は内湾する口縁部の破片である。口唇直下に平行線が横位にひかれ、線状に刻み状の刺突が加わっている。この沈線から2条の沈線が垂下している。地文は単節 LR 。

外 25 は胴部の破片である。上端に隆帯が巡る。

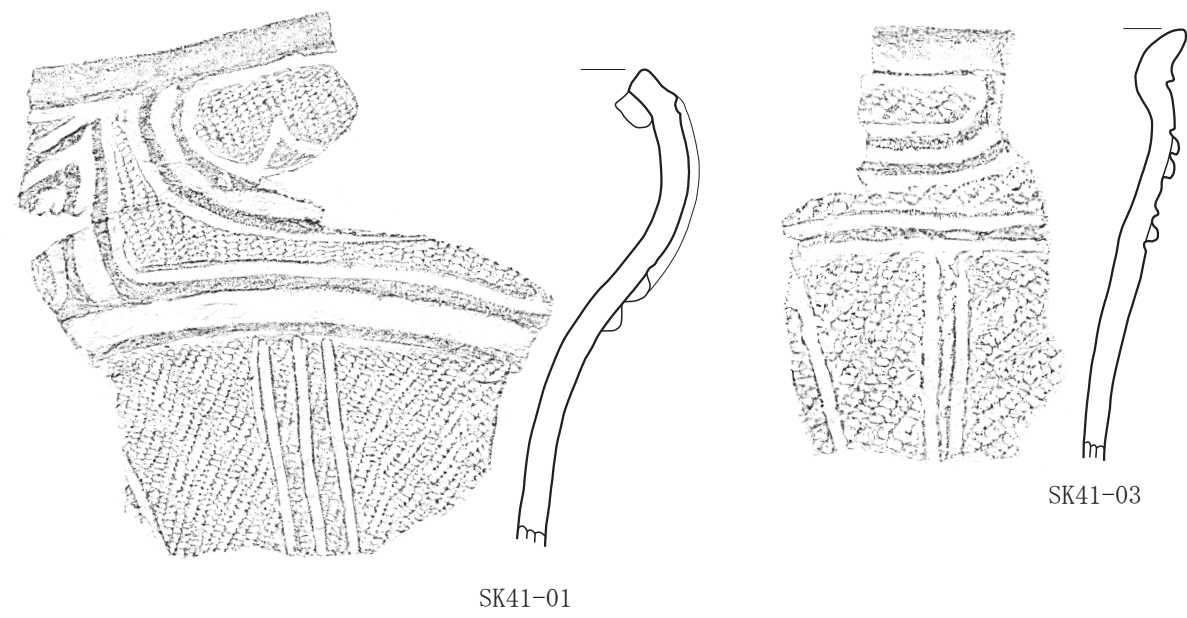
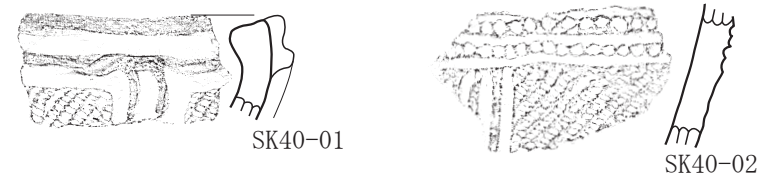
外 03 は深鉢胴部資料である。口縁及び底部は欠損する。口縁部文様帯は、太い沈線による楕円の区画を設けるもので渦巻きは見られない。胴部には幅広の磨り消し懸垂文が垂下する加曾利 E Ⅲの新段階に比定される。



第7图 3区遺構出土縄文土器(1)

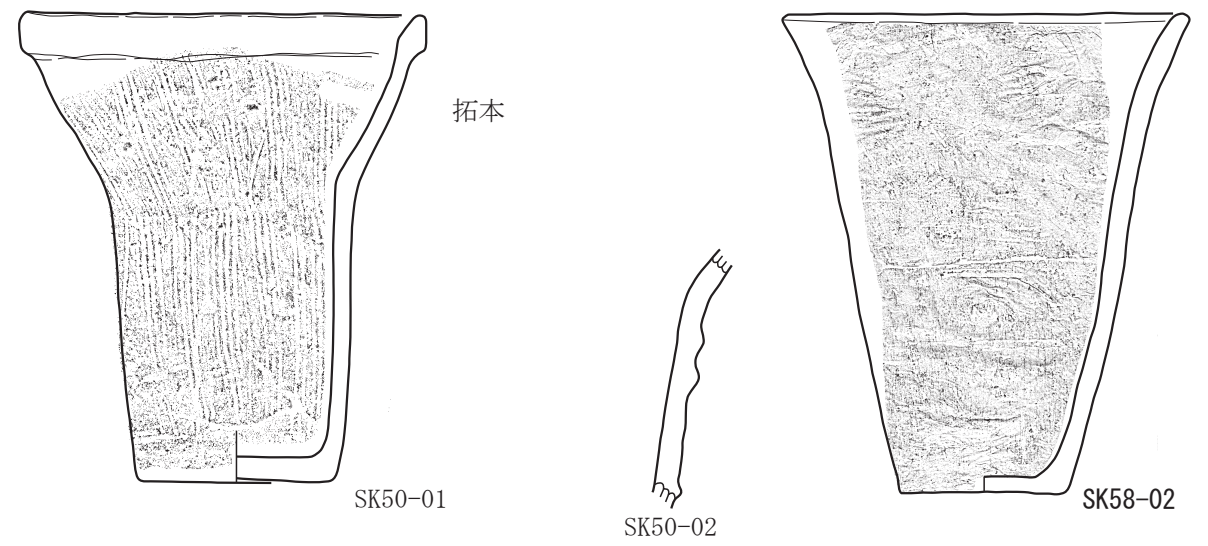
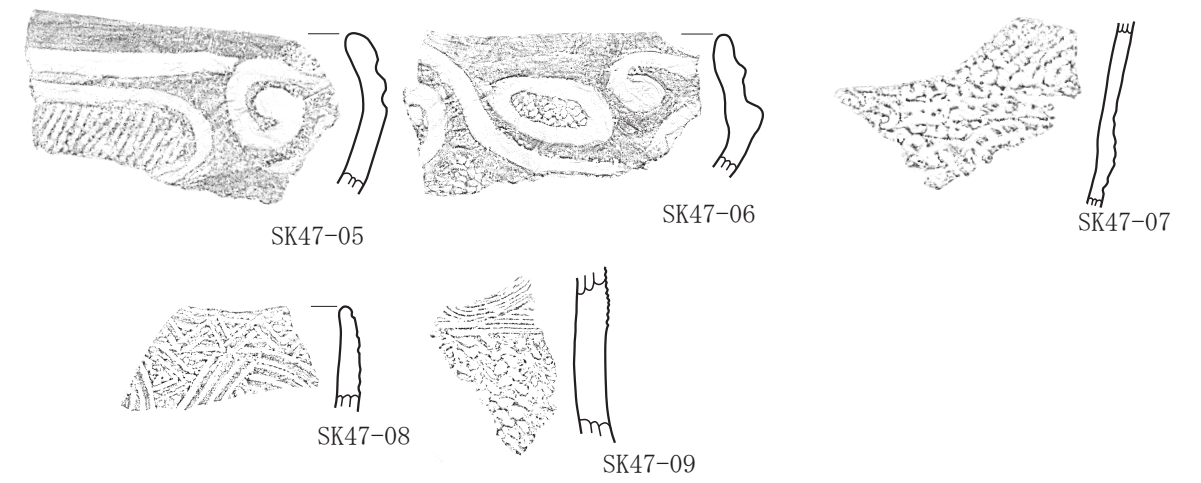
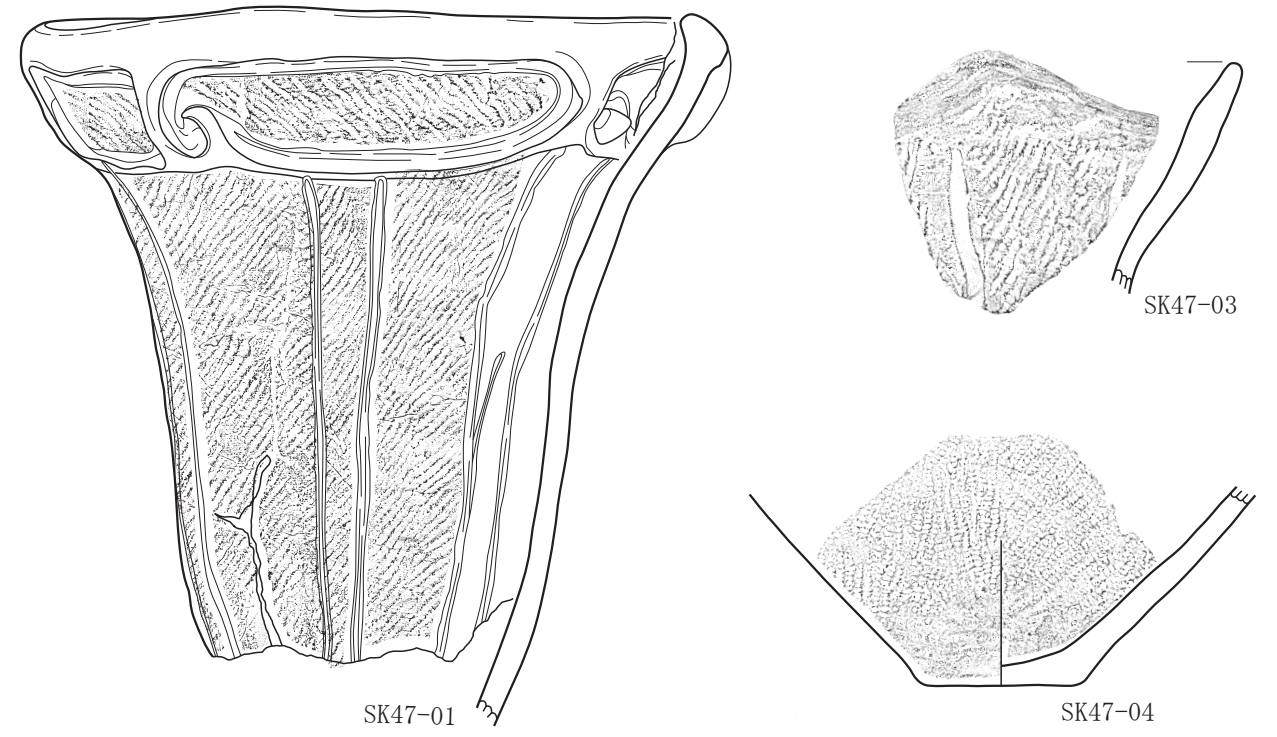


第8图 3区遺構出土縄文土器(2)



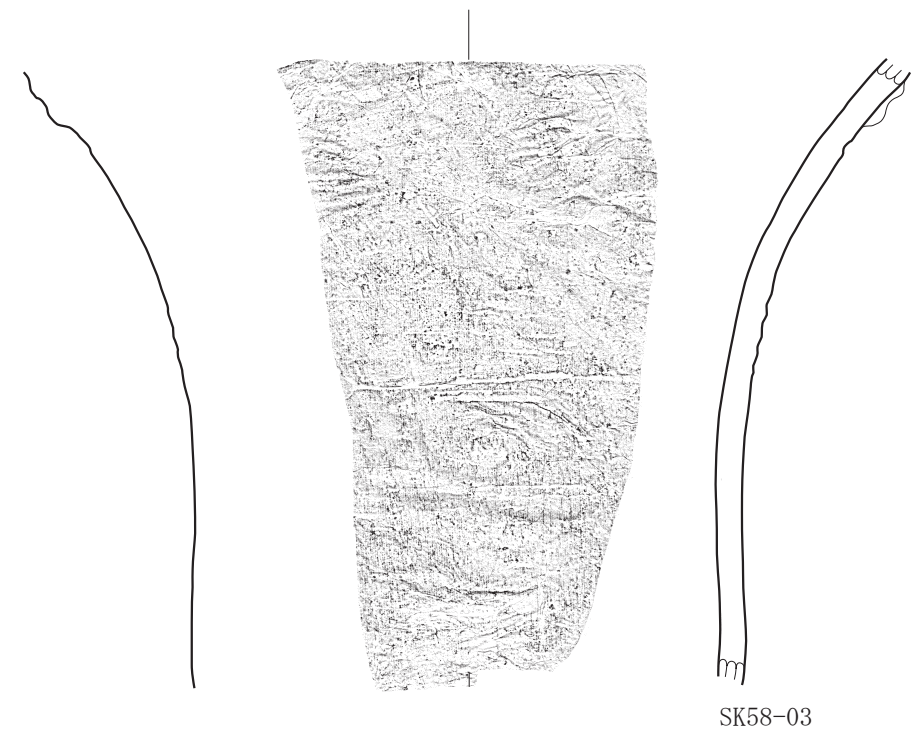
0 1/3 10cm

第9图 3区遺構出土縄文土器(3)

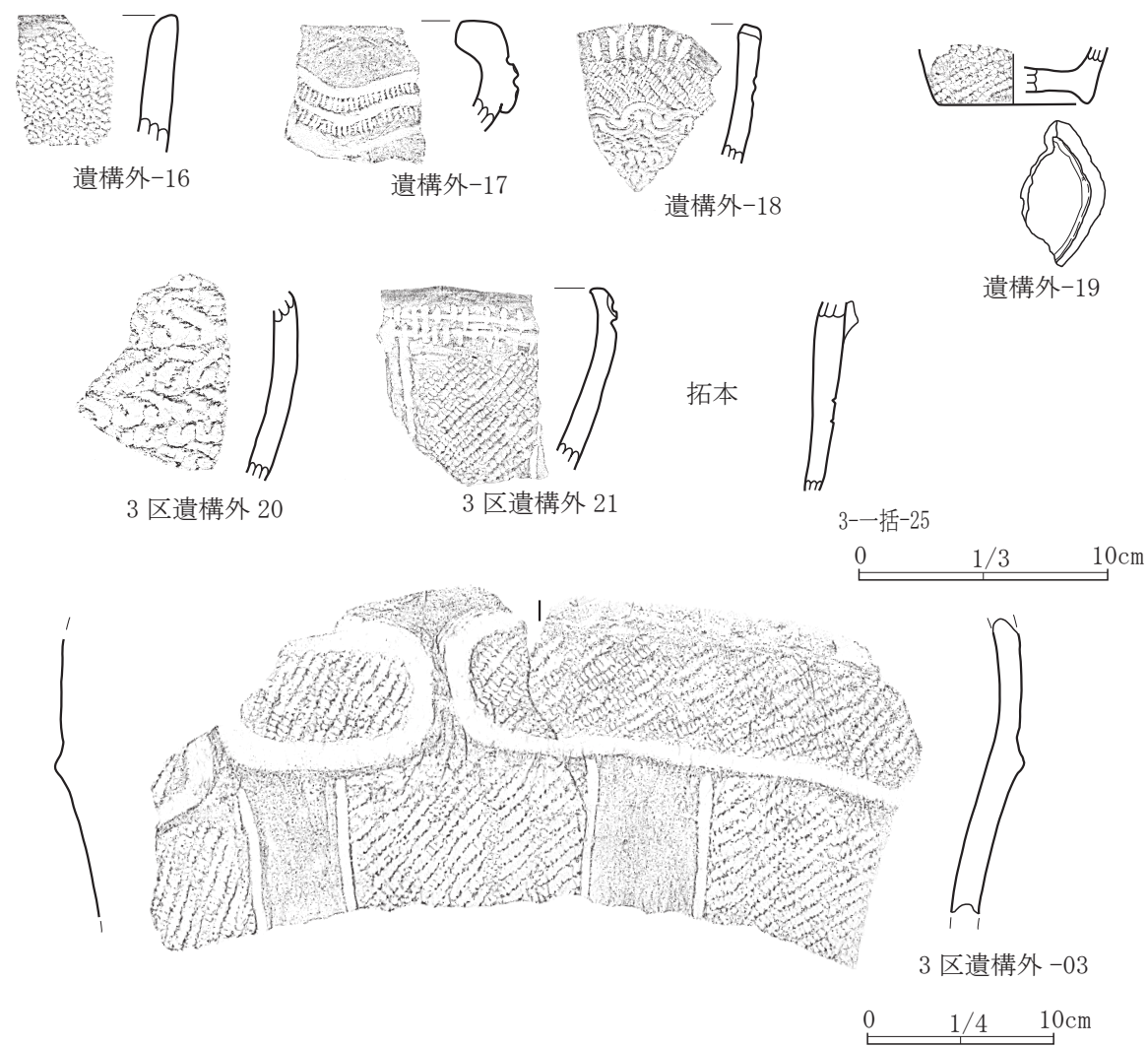


0 1/3 10cm

第10图 3区遺構出土縄文土器(4)



第 11 図 3 区遺構出土縄文土器 (5)



第 12 図 3 区遺構外出土縄文土器

第 6 項 4 区

R2SK-01・02 は土器片錘である。重量は 01 が 20.7、02 が 13.2 g である。

SI

SI15-01 は 4 単位の大波状口縁の深鉢である。刻みを有する隆帯が波頂部より S 字に垂下し胴部の隆帯に連結される。口縁部文様帯は隆線により区切られ窓枠状の区画が設けられ内部に 2 条の角押列は並走する。阿玉台Ⅲ式もしくはⅣ式の土器である。

SI16-02

SI16-03 は深鉢口縁部の資料である。波状口縁の波底部の破片であろうか、波頂部から続く隆線が波底部で Y 字に連結されて突起となる。口縁直下及び突起部分に沿って対称形に 2 条 1 単位の角押列が連続施文される。地文はない。阿玉台Ⅲ式と判断される。

SI16-04 は浅鉢の口縁部破片である。横 S 字型の隆帯が貼りつけられ、内部には縄文が施文されている。阿玉台Ⅳ式と考えられる。

SI16-05-1

SI16-05-2

SI16-05-3

SI16-06

SI17-02

SI17-03

SI17-04

SI17-05

SI17-06

SI17-07

SI17-08

SI07-09

SI17-10

SI17-11

SI17-11b

SI19

SI19-34

SI19-35

SI19-36

VSK(土坑)

V2SK-02

V2SK-03

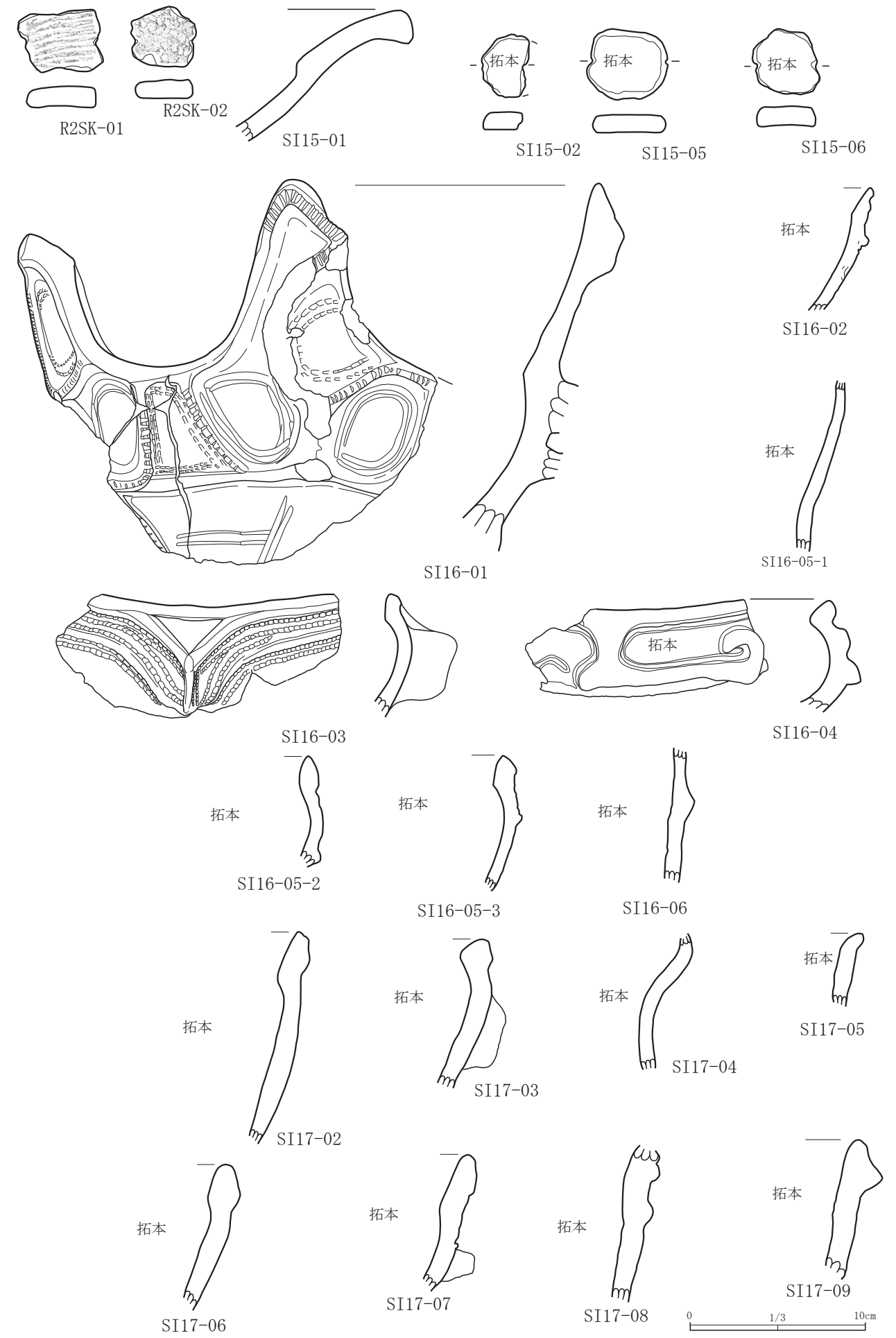
V2SK-04

VSK-01

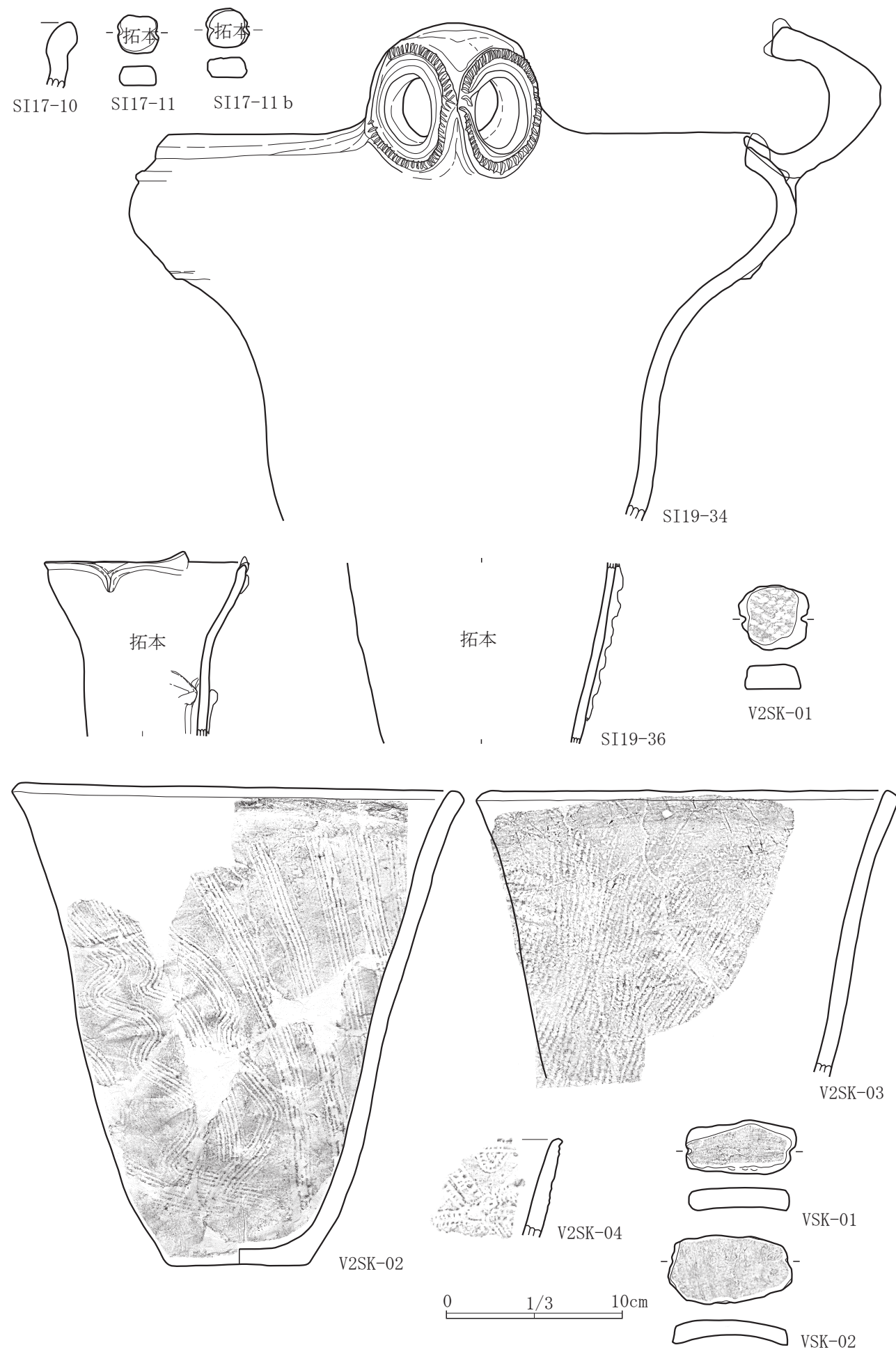
VSK-02

VSK-01

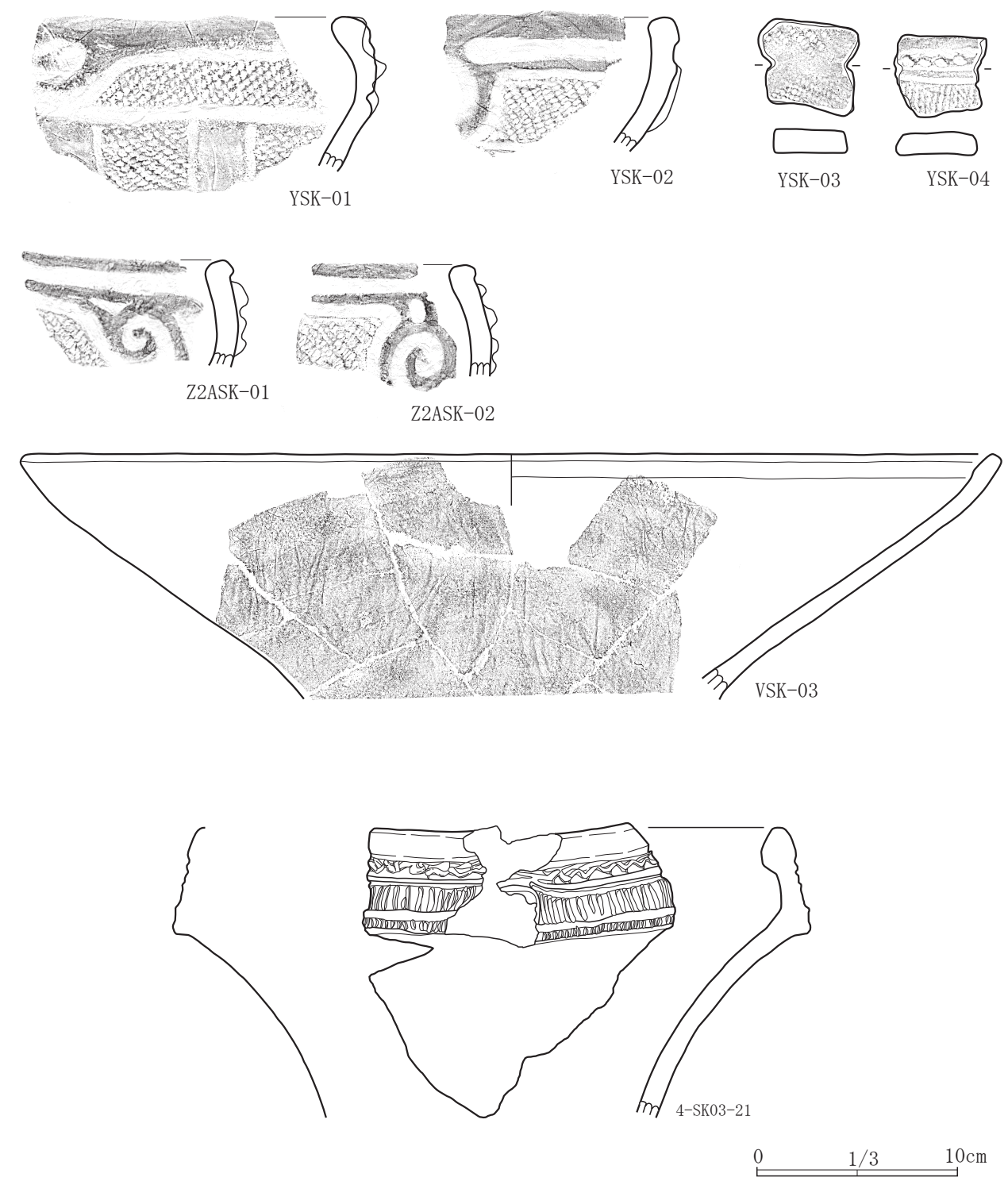
VSK-02
 Z2ASK-01
 Z2ASK-02
 VSK-03



第 13 图 4 区遺構出土繩文土器 (1)



第14图 4区遺構出土縄文土器(2)



第15图 4区遺構出土縄文土器(3)

第7項 5区

SI

SI03

SI03-03 キャリパー型の深鉢で口縁部文様帯には褶曲文を描く土器である。八王子七郎内遺跡の資料に見られる資料であり、南西関東の影響を受ける。加曾利 E1 式に含まれるものであろう。同様の資料は本遺跡東地区 12 号土坑出土 1 の遺物に類似するものの、石岡市東大原例に近い。

SI20

SI20.29-01

SI21

SI21-01

SI21-02

SI21-03

SI21-04

SI21-05

SI21-06

SI21-07

SI21-08

SI23

SI23-02

SI23-03

SI23-04

SI23-05

SI26

SI26-31

SK

SK02

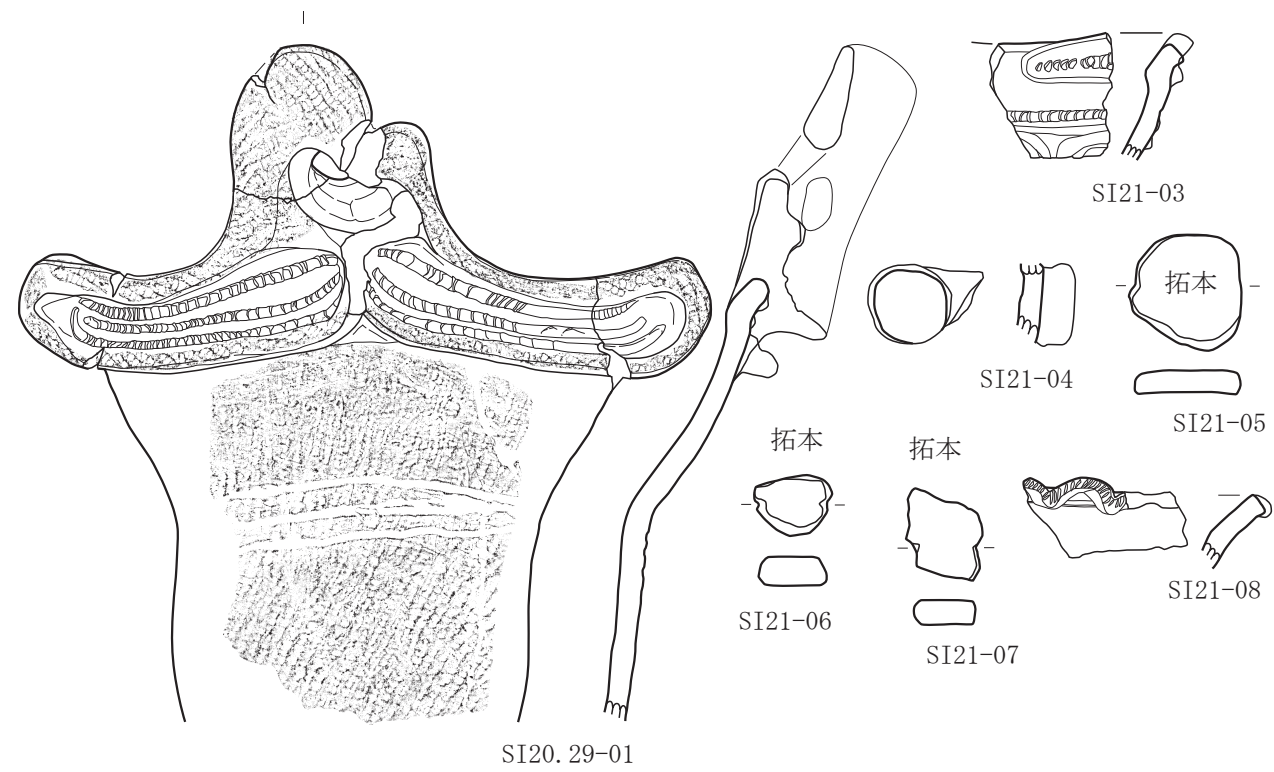
SK02 - 01 はキャリパー型の完形品である。平縁の口縁で大小 2 単位の把手が対峙して付される。大型の把手は複数の円環状の組み合わせにより構成され、小形突起は単体の円環により構成される。口縁部の文様帯は隆帯による横位の区画帯を設け、内部には同様な隆帯により波状が崩れた隆帯が X 字条に貼付される。隆帯の整形は粗雑で、全体にシャープさにかける。胴部には縦方向に施文される単節 RL が縦方向に施文される。加曾利 E1 式古段階と考えられるが、全体の文様にシャープさを欠く。

SK08

SK08-01

5 区 SK34-1 は、キャリパー型の深鉢である。口縁は平縁で 2 単位の大小の把手が対峙する。大型の把手は複数の円環状の組み合わせによる中空把手である。口縁部文様帯と胴部文様帯は頸部に巡る 2 重隆線により区画される。口縁部文様帯には乳房状の渦巻が 6 単位配されこれを連結する様に斜方向の隆帯が波状に全周している。また、口縁直下には交互刺突によるクランク文様がめぐる。三角形の区画部には太い縦位沈線が密に充

填される。胴部文様帯は縦方向の沈線が 6 単位に懸垂し、胴部を 6 区画に分ける。内部には鋸歯状文が垂下し空間には、口縁部文様帯同様の太い沈線が充填される。胴部下半、底部付近は無文となる。形状文様は、勝坂式の要素で、阿玉台式の要素は見出せない。口縁直下のクランク文は広義の中峠的な手法である。また、胴部に垂下する区画を構成する沈線には交互刺突が施され、勝坂の様相を示す。乳房状の渦巻き文は栃木県北部の浄法寺類型の土器に近似している。さらに、中空把手の形状は大木 8 a の様相をも有している。



SI20.29-01

SI21-03

SI21-04

SI21-05

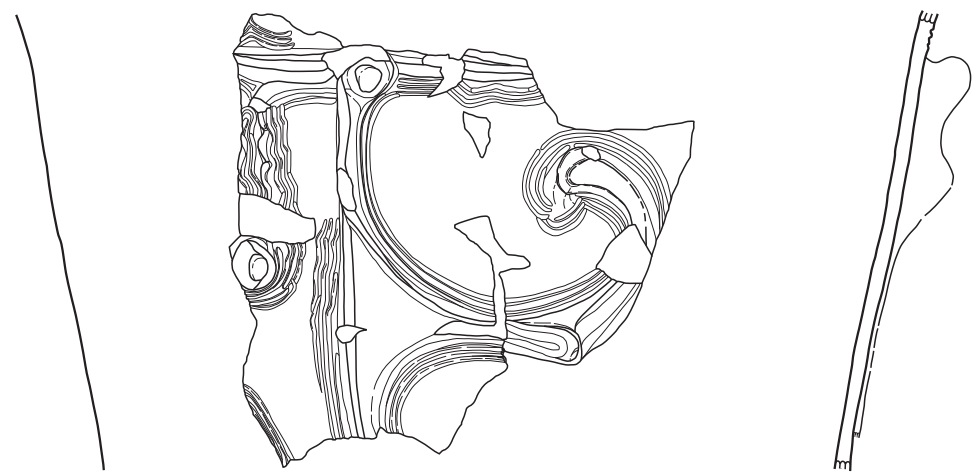
拓本

拓本

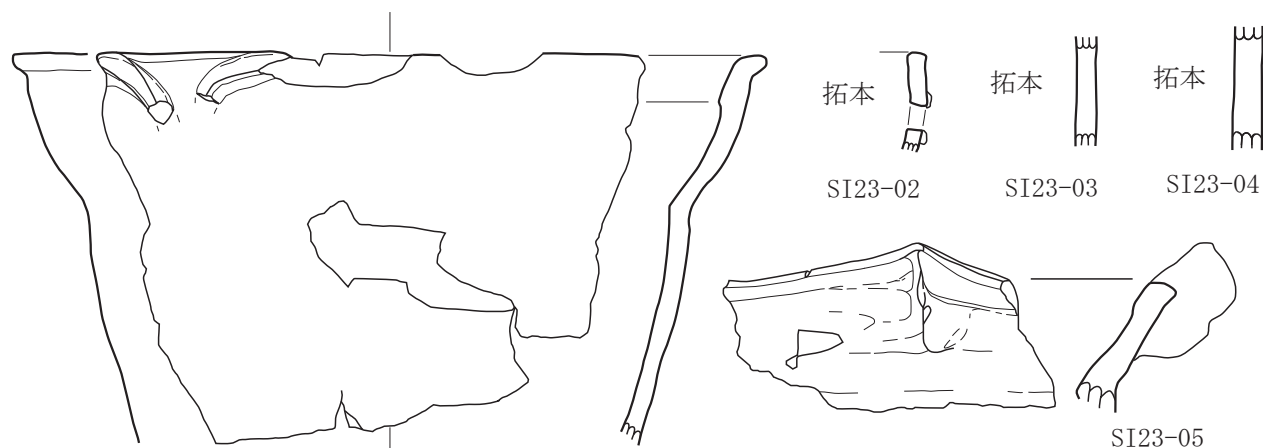
SI21-06

SI21-07

SI21-08



SI21-01



SI21-02

拓本

拓本

拓本

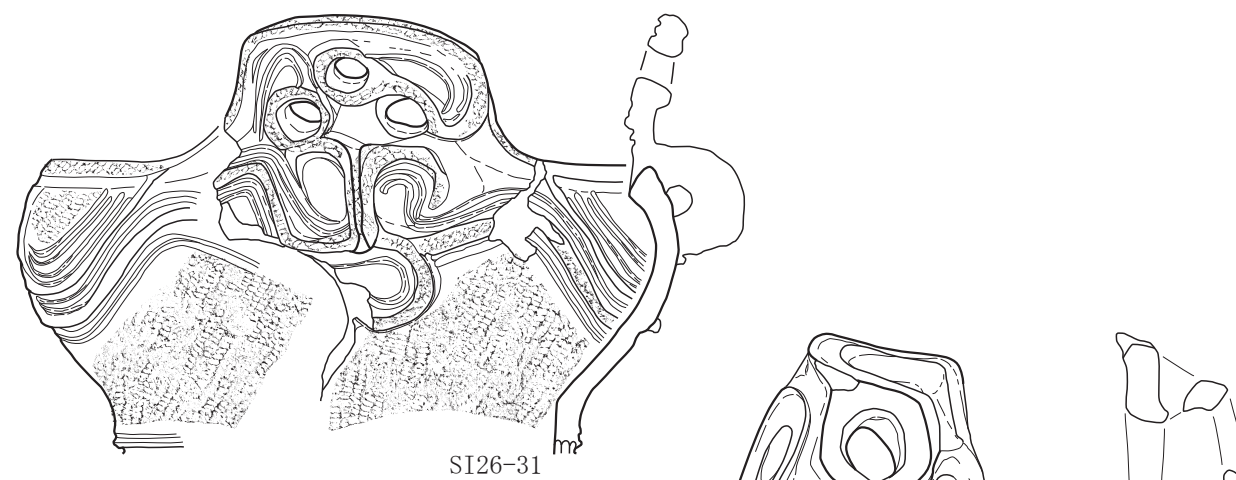
SI23-02

SI23-03

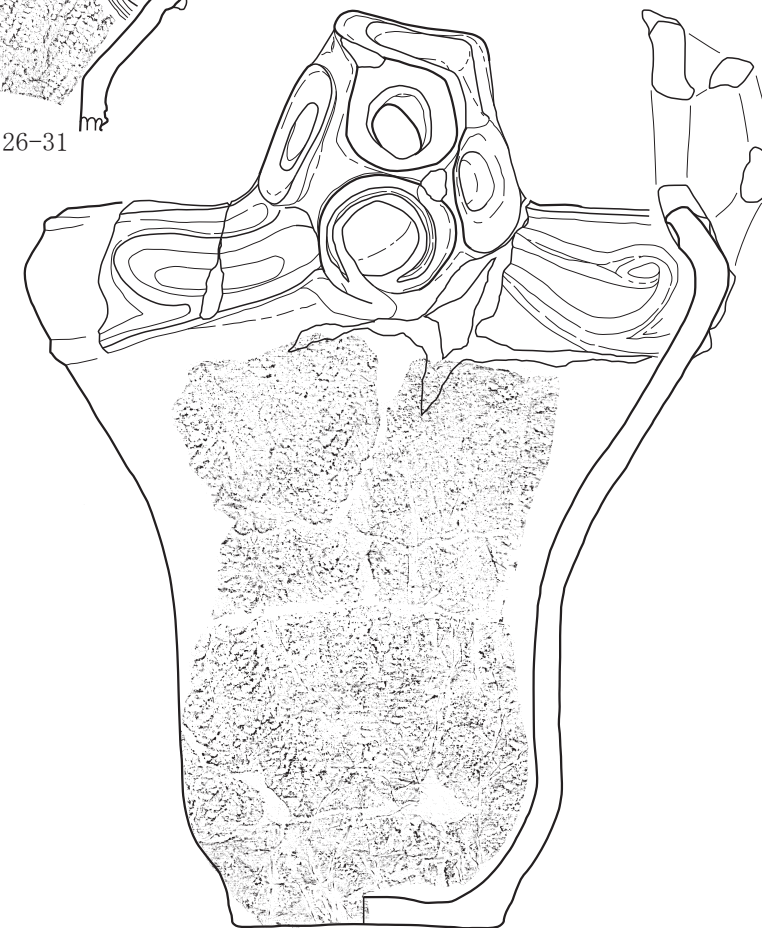
SI23-04

SI23-05

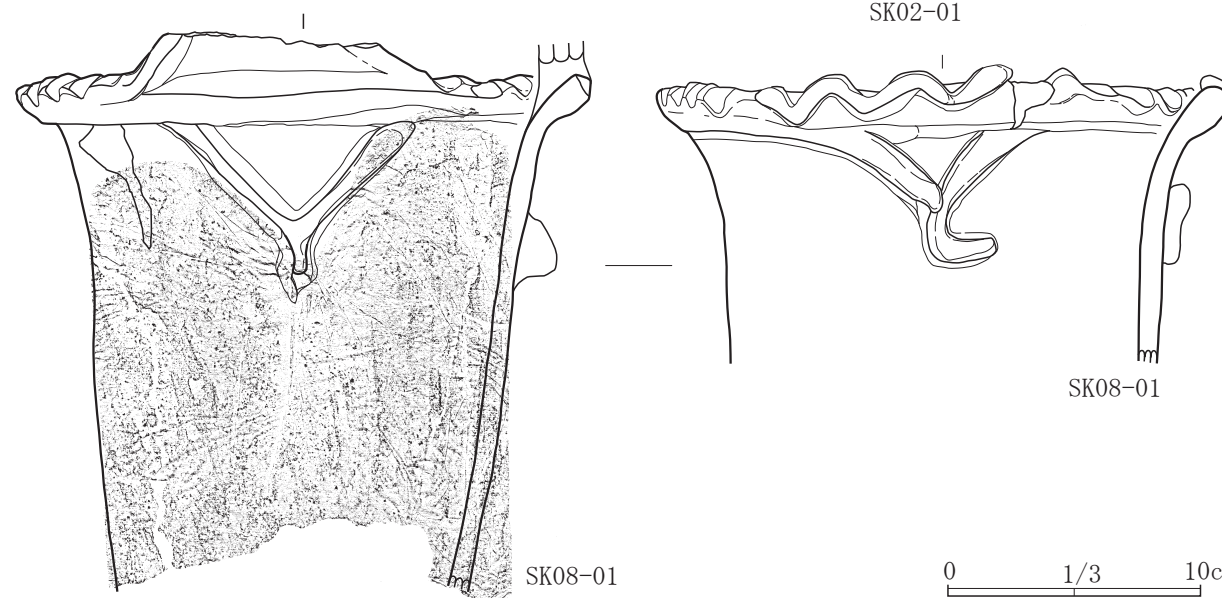
0 1/3 10cm



SI26-31



SK02-01



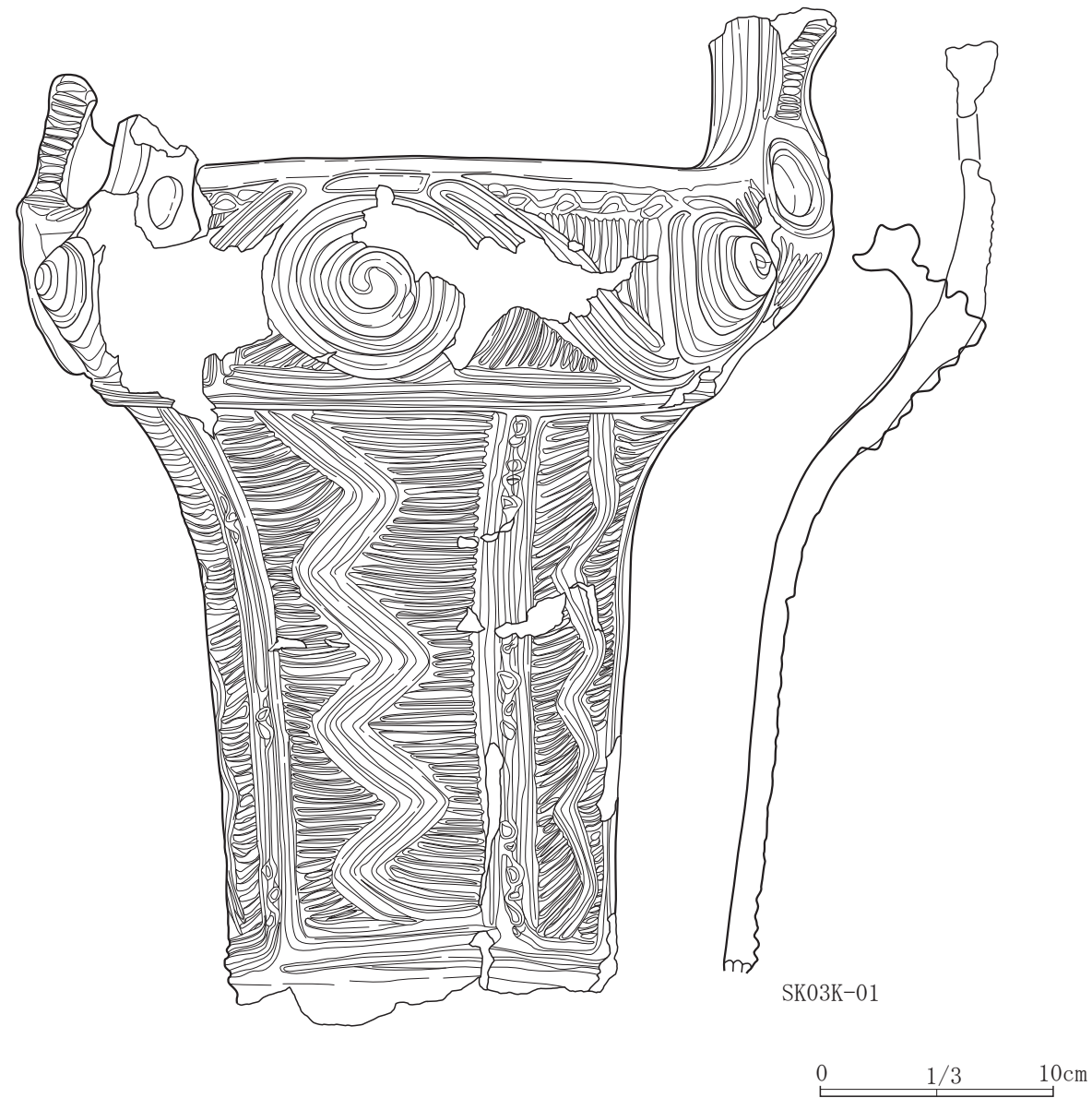
SK08-01

SK08-01

0 1/3 10cm

第 16 图 5 区遺構出土縄文土器 (1)

第 17 图 5 区遺構出土縄文土器 (2)



第 18 図 5 区遺構出土縄文土器 (3)

第 2 節 石器

本遺跡で検出された石器はきわめて少ない。周辺に石材が乏しいことに起因するものか、集落の性格なのかは判然としない。掲載した資料は明確に tool と判断されたものと、特徴的な剥片のみで他は割愛している。

石核

4-SK01-06、3- 石器 01、2 石器 01、3SI23-02、3- 石器 -02 の 5 点は石核である。4-SK01-06 はメノウで上下両端からの剥離が行われる。剥片の大きさから石鏃などの製作が想定される。3- 石器 01 はチャートである。薄い板状になった残核である。やや横長の剥片を剥がしている。2 石器 01、3SI23-02 は黒曜石の石核である。小形の剥片を剥がしている。2 石器 01 は紡錘形を呈しマイクロコアのような形状であるが剥離が両極より行われるもので、縄文時代の石器と判断した。3- 石器 -02 は黒色緻密質安山岩製の亀甲状の核である。上面に表皮を残すが、打面は調整のために薄く表皮を剥がしている。旧石器時代もしくは縄文草創期にかかわる可能性がある。

剥片

4-SI16- フクド、2- 石器 -02、SI04-04 は縦長の剥片である。素材は 4-SI16- フクドがチャート、2- 石器 -02 が頁岩、SI04-04 は黒曜石である。2- 石器 -02 には二次的な加工が施されている。

SI26-03、SI09-02、SI26-01 は横長の剥片である。何れも黒曜石を素材にするもので SI26-03 には基部側に二次的な加工の痕跡が見られる。また、下端部には微細剥離が見られ、使用痕と判断される。

石鏃

2- 石器 -05、2- 石器 -03、2- 石器 -04、2- 石器 -06、3-SI21-08、4-SI17-12- フクド、4-SI15-07 の 7 点が出土している。2- 石器 -05 は先端及び右側脚部は欠損する。他はほぼ完形である。形状は 2- 石器 -05、2- 石器 -04、3-SI21-08、4-SI17-12- フクドは凹基三角鏃である何れも脚部は短く挟り込みも少なく長脚鏃はない。残る 3 点は挟り込みが殆ど無い平基三角鏃、素材は 2- 石器 -05、2- 石器 -03 はチャート。その他は黒曜石である。

楔型石器 (ピエスエスキュー)

SI04-05 は黒曜石を素材にするもので、両極から剥離が行われている。石鏃の未成品の可能性もあるが、石鏃の製作にかかわる遺構は検出されていない。

石錐

3-SI21-07 は黒曜石製の槍形を呈する石器である。先端部の加工の状況より錐と判断した。

磨製石斧

08 は基部を欠損する定角式の石斧である。素材は閃緑岩で全体の研磨は丁寧に行われている。

09 は刃部を欠損する定角式の石斧である。刃部欠損後に折損部分に剥離を加えている。

4 区石器 06 は頁岩質の磨製石斧である。刃部は欠損しており、形状は不明。断面形はやや楕円形に近く丸みを帯びる。

10 は断面がほぼ方形を呈する乳棒状の石斧に近い。刃部は欠損している。折損部は僅かに打撃が加わる。材質は砂岩である。全体の研磨は丁寧である。

3- 石器 -05 は基部側及び刃部の一部を欠損する。定角式と判断される。全体によく研磨されているが、側面は敲打痕が残される。材質は細粒斑レイ岩。

4-SI01-18 フクドは長方形を呈する刃部の細片である。緑色岩系の石材を用いているが硬質で作りもよい。断面は何れも折り取られたもので、擦切によるものではない。

擦切り石器

3-石器-04は板状を呈し下端が諸刃の刃部となる。上面及び左側面は欠損しており本来の形状は不明であるが、縄文後期から晩期にかけて出土する特徴的な石器と判断される。材質は砂岩で部分的に被熱により赤変している。

打製石斧

3-石器-03は表皮を残す剥片を素材にするものである。側縁の剥離は粗雑で加工は片面のみに施される。刃部に僅かながら使用痕が残る。材質は安山岩。

06はやはり表皮を残すもので、刃部を欠損している。頁岩製の打製石斧である。表皮側の剥離は部分的に行われるもので片面を中心に調整が施されている。

敲石

19は自然礫の砂岩を素材にするもので、棒状の石材の端部に敲打による摩滅が見られる。また、この摩滅部分には擦痕状の擦り跡が観察され、敲打を目的とするものではない可能性がある。

凹石

3は長方形に全体を整形した後に上下両面に窪みを穿っている。下端部は欠損している。上端部は敲打痕が残り敲石としても使用されている。材質は輝石安山岩である。

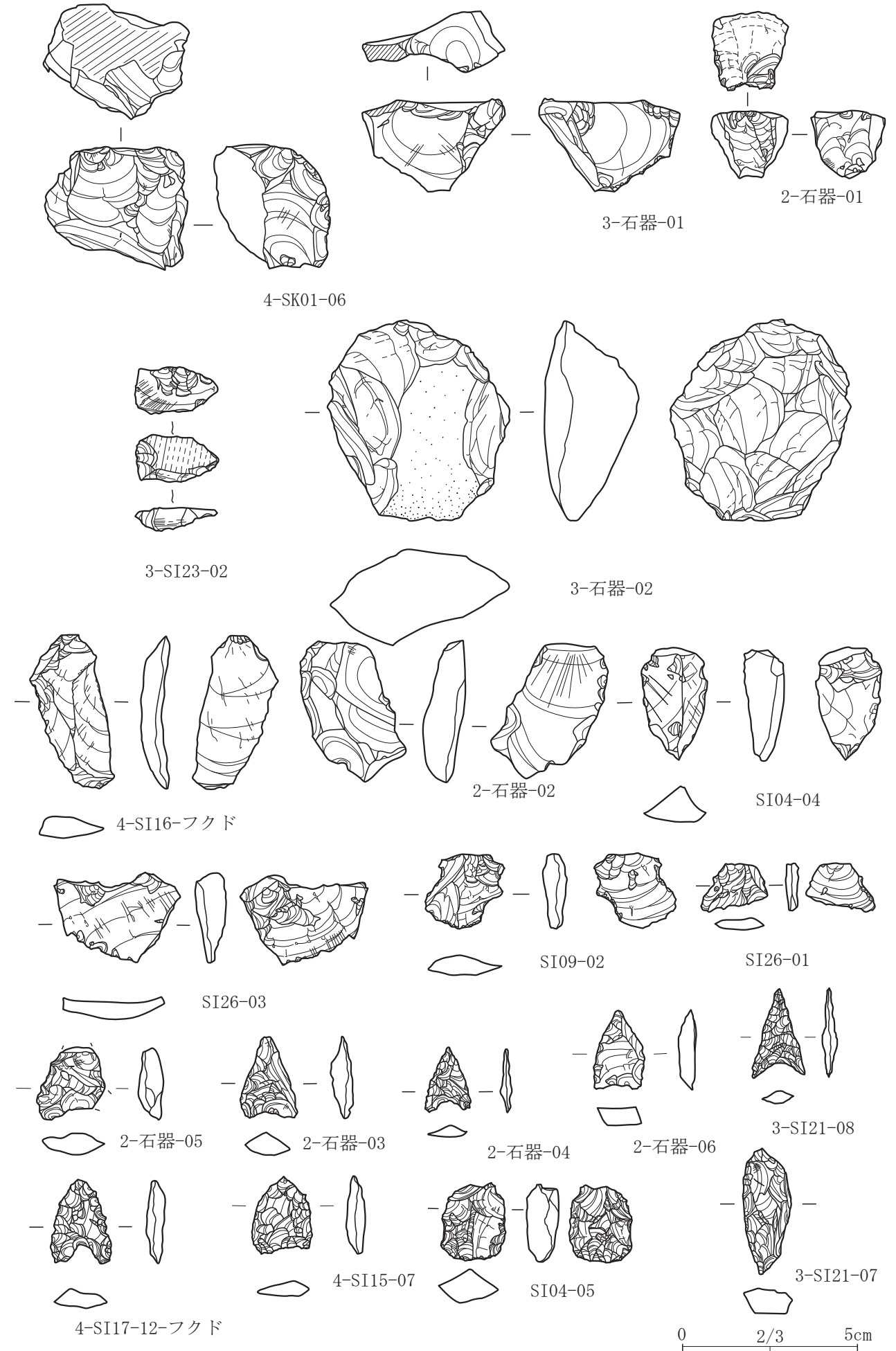
3-石器-07は隅丸の円形を呈するもので、全体に整形を行い、上下及び両側面に窪みを穿っている。材質は輝石安山岩である。

玦状耳飾

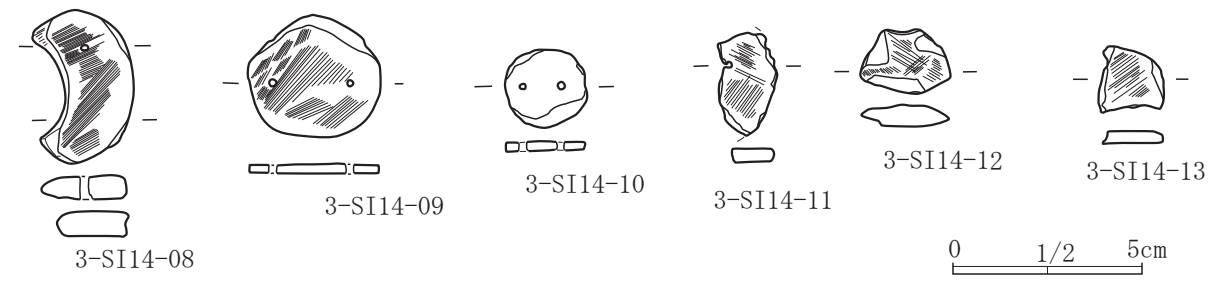
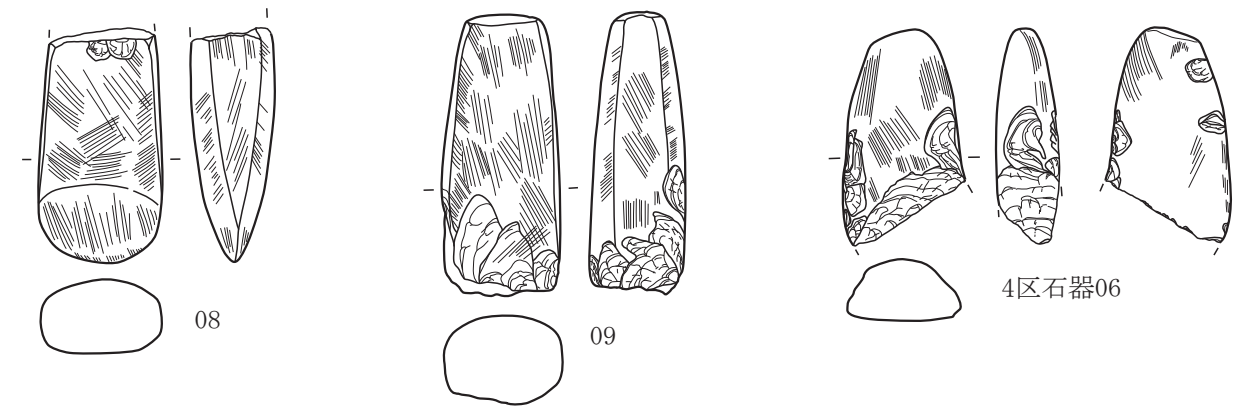
4-SI14-20は滑石を素材とする。先端部に向かい緩やかに湾曲する。断面はやや細い楕円形を呈し、端部に両面からの穿孔が行われている。上端部折損部分の研磨は行われていない。当初、滑石製模造品の勾玉を想定したが、折損部の未調整並びに補修孔の穿孔方法から、古墳時代の遺物とは明瞭な差異が認められる。形状から判断すると、群馬県新堀東源ヶ原出土の花積下層期の玦状耳飾に酷似している。富山県極楽寺遺跡、石川県三引遺跡類例とも共通するものであり、玦状耳飾編年で藤田富士夫氏が分類する浮輪型のタイプと想定される。出土状況は住居跡の床面からの出土であり、近隣に存在する関山1式古段階の資料に伴った可能性が想定できる。

垂飾（大珠）

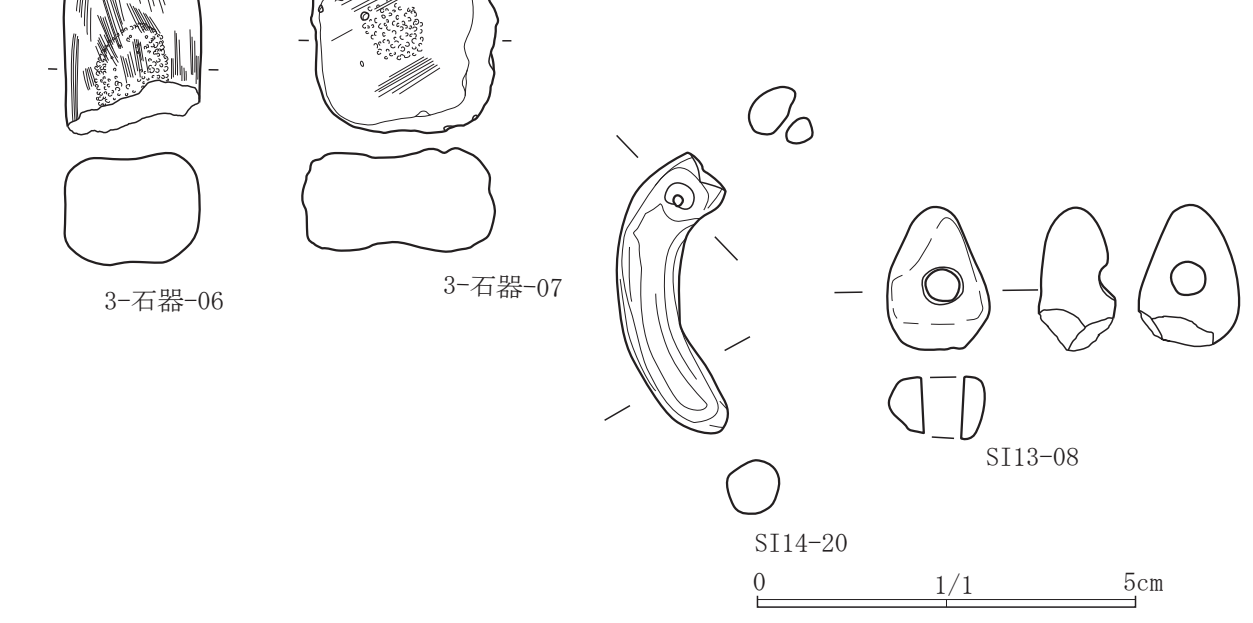
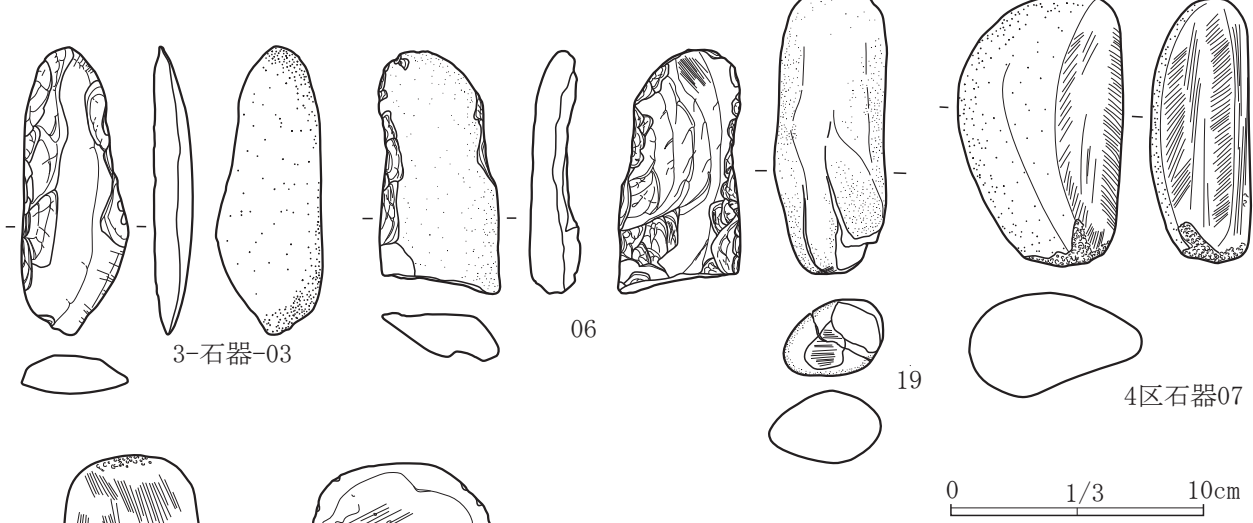
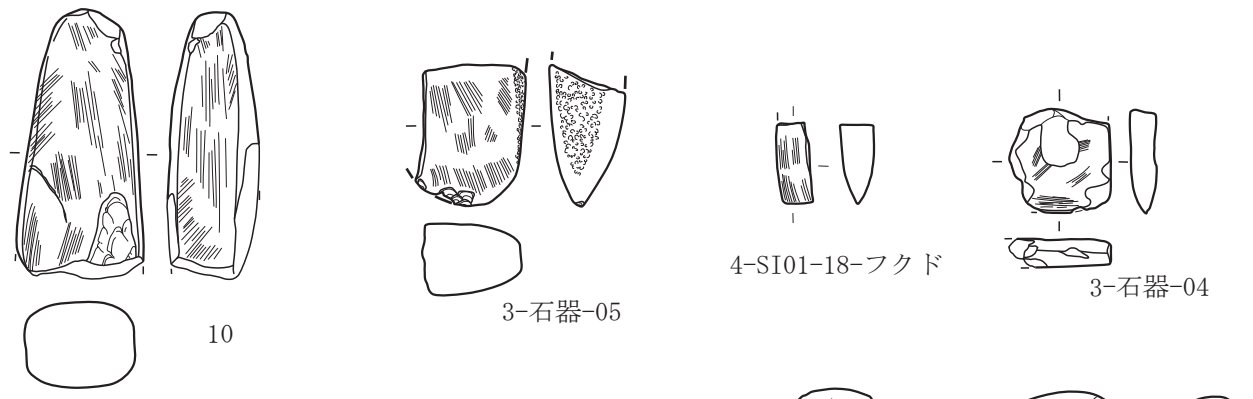
SI-13-08はヒスイの大珠である。形状は無花果形を呈し、全面によく研磨される下端部はやや欠損するが、蠟奸で青緑色の斑紋を有す。縄後晩期に見られる玉類とは異なり、穿孔は管状錐による一方からの穿孔であり後晩期の資料とは異なる。出土状況は明確ではない。本遺跡東地区においてもヒスイの大珠が出土しており、やはり中期に伴う資料と考えられる。尚、本遺物は被熱痕は認められない。



第19図 石器(1)



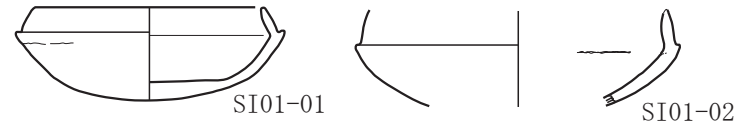
第 21 図 滑石製模造品



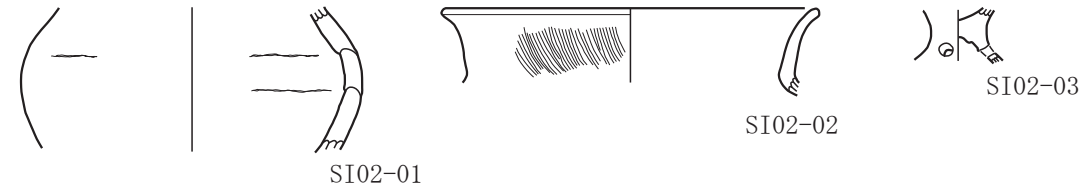
第 20 図 石器 (2)

2区

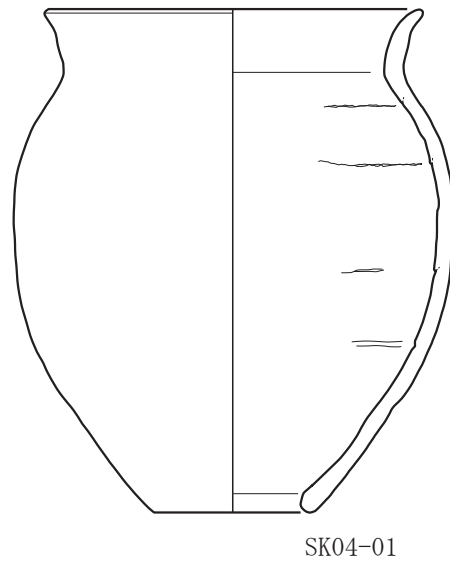
SI01



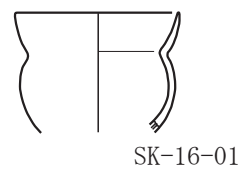
SI02



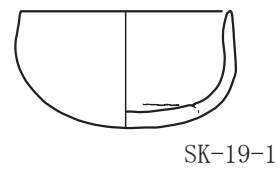
SK04



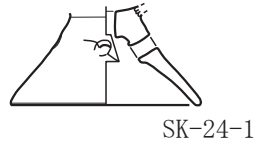
SK16



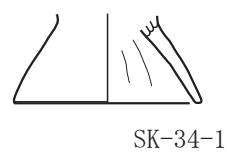
SK19



SK24



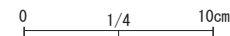
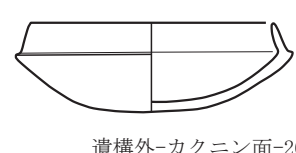
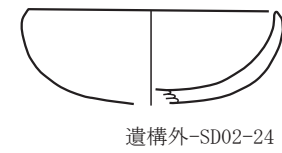
SK34



SK41



遺構外

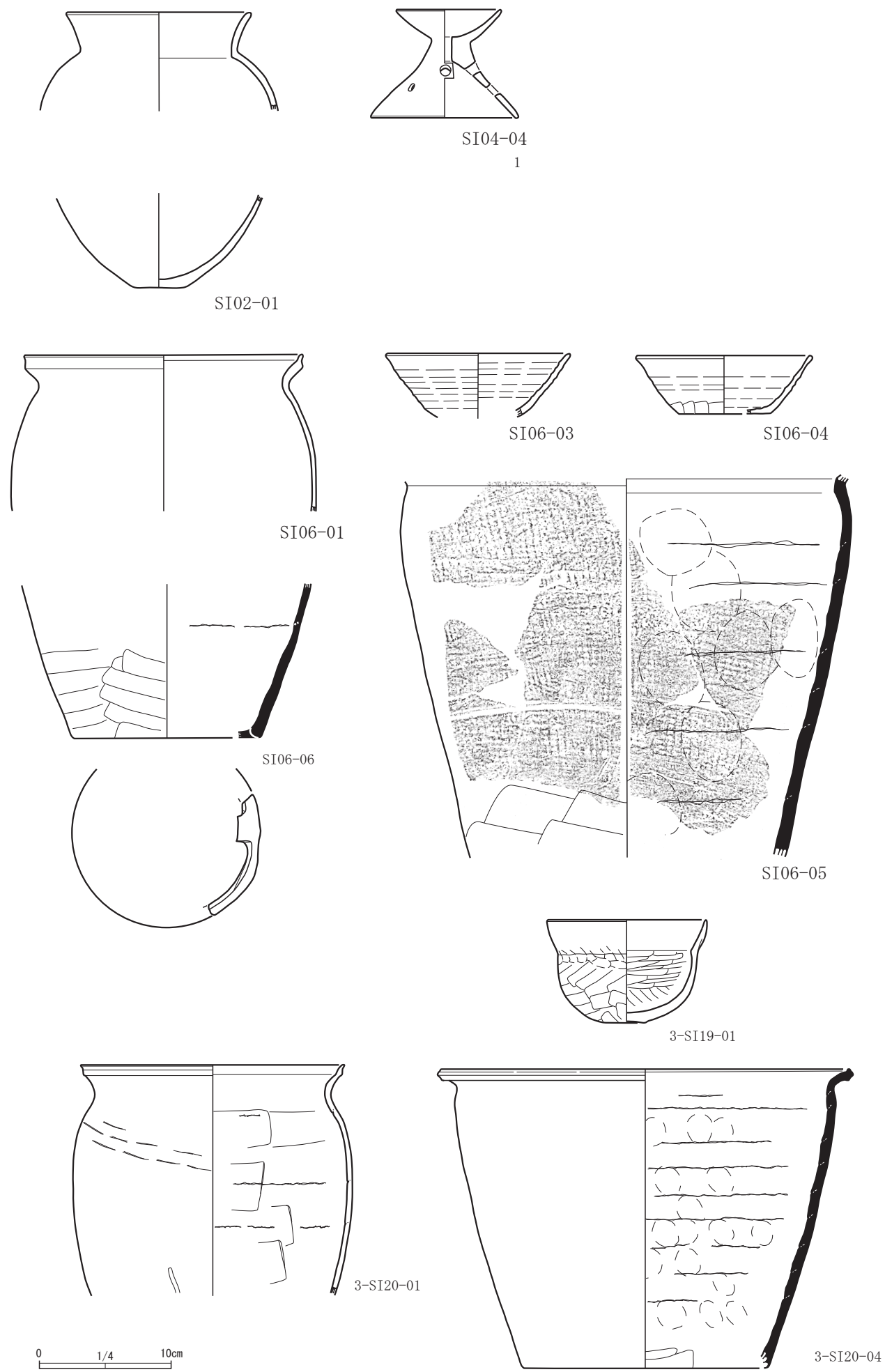


第22図 2区遺構出土遺物

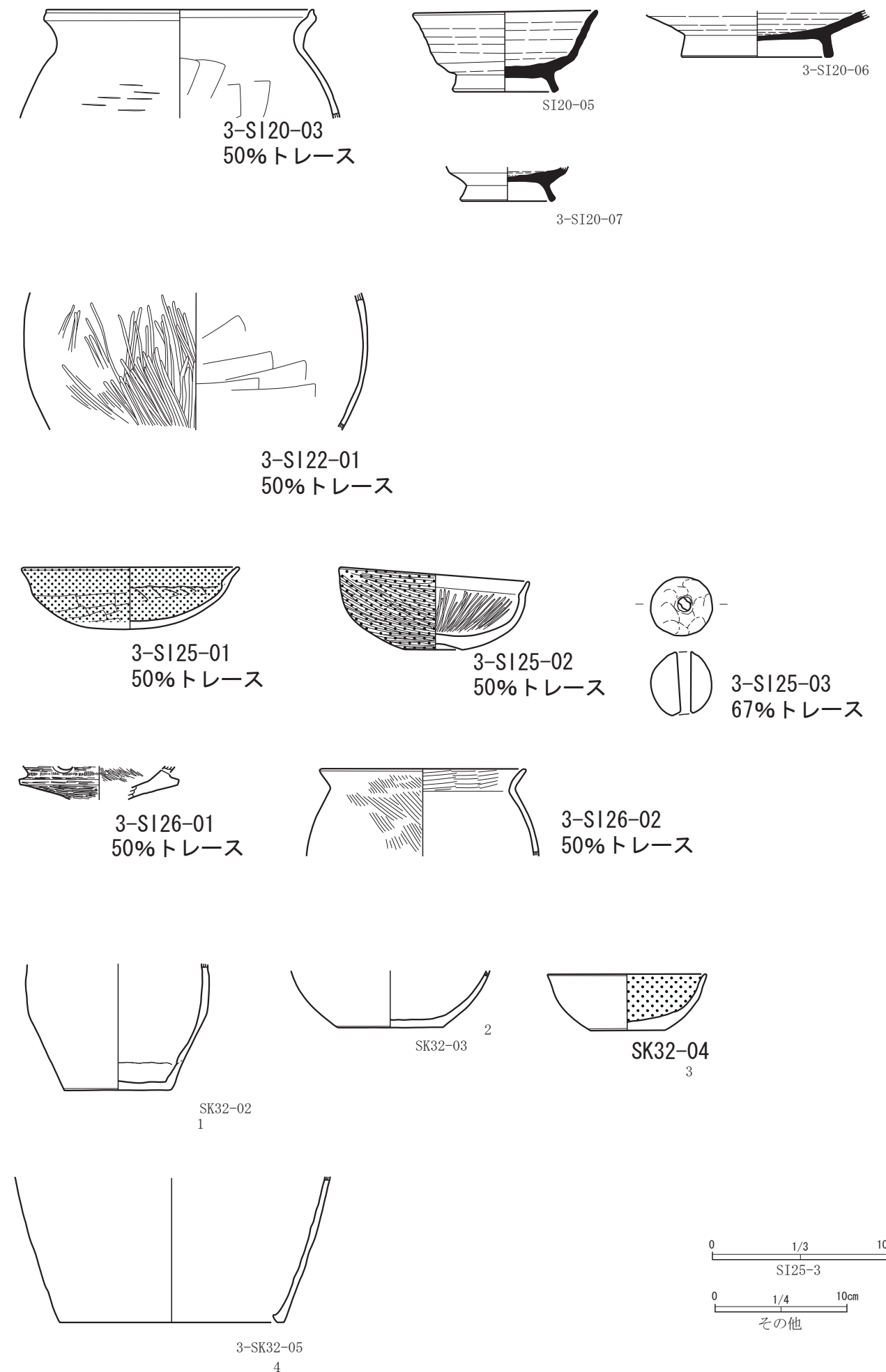
表2 2区出土遺物観察表

単位cm・g

遺構	報告番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
SI01	1		土師器	坏	12.0	丸底	4.8		底部は丸底。体部は内湾した後外傾して立ち上がる。口縁部との境に明確な稜を有し、内傾して口唇に至る。	口縁部外面はミガキ、内面は横ナデ。体部外面はナデ後ミガキ、内面は横方向のミガキ。	良好	内外面10YR3/2黒褐色	雲母・白色粒子微量。	1/2	内外面黒色処理
	2		土師器	坏	—	—	<4.8>		底部は丸底。体部は内湾した後外傾して立ち上がる。口縁部との境に明確な稜を有し、やや内傾して口唇に至る。	口縁部は横ナデ。体部外面はヘラケズリ後ミガキ、内面は放射状暗文が施される。	良好	内面10YR5/3にぶい黄褐色 外面10YR4/2灰黄褐色	白色粒子・雲母微量。	口縁部1/8	口唇は磨滅する。
SI02	1	1	土師器	甕	—	—	<7.3>		最大径が肩部にある。	胴部内面はナデ後ミガキ、頸部下内面には指頭圧痕。輪積痕あり。	良好 二次焼成あり	内外面7.5YR6/6褐色	長石・石英・黒雲母やや多量。	胴部上半2/3	
	2	1	土師器	甕	(19.5)	—	<4.4>		口縁部のみの資料。直立した後、口唇が短く反る。	内外面ハケ。	良好	内面10YR5/2灰黄褐色 外面2.5YR4/2暗灰黄	白色粒子・雲母微量。	口縁部片	
	3		土師器	高坏	—	—	<2.9>		接合部のみの資料。脚部はラッパ状に開く。穿孔の単位は不明。	外面縦方向のミガキ。	良好 二次焼成あり	内面2.5Y6/3にぶい黄褐色 外面10YR7/4にぶい黄褐色		接合部のみ	
SK04	1	1	土師器	甕	(19.5)	8.3	26.0		胴部は外傾して立ち上がり、中位に最大径を有する。口縁は僅かに外反して立ち、口唇で短く反る。	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ後上位～中位に同じく縦方向のミガキを施す。	良好 黒斑あり	内面7.5YR7/4にぶい褐色 外面7.5YR5/6明褐色	小礫（長石・石英）やや多量。白色粒子・雲母微量。	口縁～胴部1/5	
SK16	1	2	土師器	埴	(8.5)	—	<6.2>		胴部は球形。頸部で「く」の字に外反し、口縁は内湾気味に開く。	口縁部は横ナデ。頸部外面に短い縦方向のハケ。胴部外面は二次焼成により器面剥落するが、一部ミガキが観察される。胴部内面縦方向のミガキ。	良好 二次焼成あり	内外面 7.5Y7/6褐色	黒色粒子・白色粒子少量。スコーリア微量。	口縁～胴部1/5	
SK19	1	1	土師器	坏	11.0	丸底	6.0		底部は丸底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	外面は器面が剥落するが、ヘラケズリが観察される。内面はナデ。	良好 黒斑あり	内面 2.5Y5/6明赤褐色 外面 7.5YR2/8黄褐色	白色粒子やや多量。小礫・雲母少量。	ほぼ完形	内外面赤彩あり。
SK24	1		土師器	器台	—	10.0	<5.2>		受部中央には穿孔あり。脚部は直線的に開く。穿孔は4単位。	接合部外面はナデ。脚部外面はミガキ、端部はナデ後ミガキ、内面はヘラナデ。	良好	内外面 10YR7/4にぶい黄褐色	黒色粒子・雲母少量。白色針状物質微量。	脚部1/2	
SK34	1		土師器	台付甕	—	(5.0)	<4.5>		僅かに内湾して立つ。	外面はナデ後ミガキ、端部外面は横ナデ。内面はヘラナデ。	良好	内面10YR6/6明黄褐色 外面10YR6/4にぶい黄褐色	白色粒子・雲母少量。	脚部1/8	
SK41	1		土師器	高坏	—	—	<2.7>								
遺構外	1	SD02	土師器	坏	(13.8)	—	<4.8>		底部は丸底。体部は内湾して立ち上がり、口唇に至る。器壁やや厚い。	外面は体部下端から底部にかけてヘラケズリの後、口縁～体部横方向のミガキを施す。内面はミガキ。	良好	内面7.5YR8/3浅黄褐色 外面10YR6/4にぶい黄褐色	ほぼ精良。	口縁～底部1/4	内外面黒色処理あり
	2	カクニン面	土師器	坏	12.8	丸底	4.6		底部は丸底。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部との境に明確な稜を有する。口縁部は内傾している。	口縁部は横ナデ。体部外面はヘラケズリ後ミガキ、内面は横ナデ。	良好	内面7.5YR7/6褐色 外面10YR7/4にぶい黄褐色	黒色粒子・雲母・白色粒子少量。白色針状物質微量。	ほぼ完形	

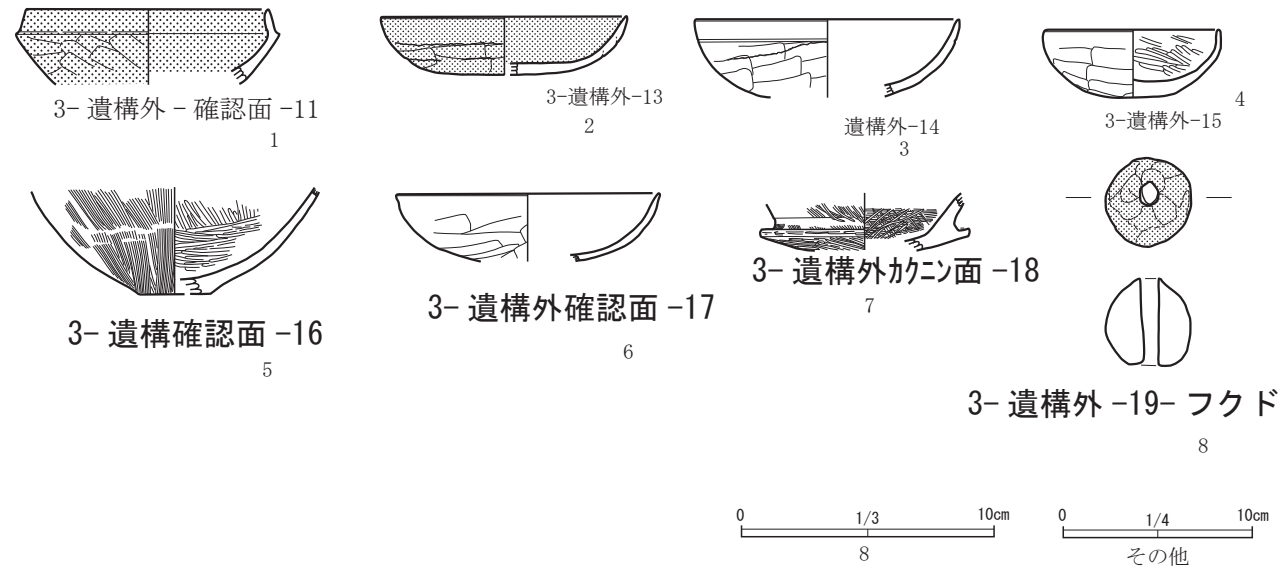


第 23 図 3 区遺構出土遺物 (1)



第 24 図 3 区遺構出土遺物 (2)

遺構外



第 25 図 3 区遺構出土遺物 (3)

表 3 3 区出土遺物観察表 (1)

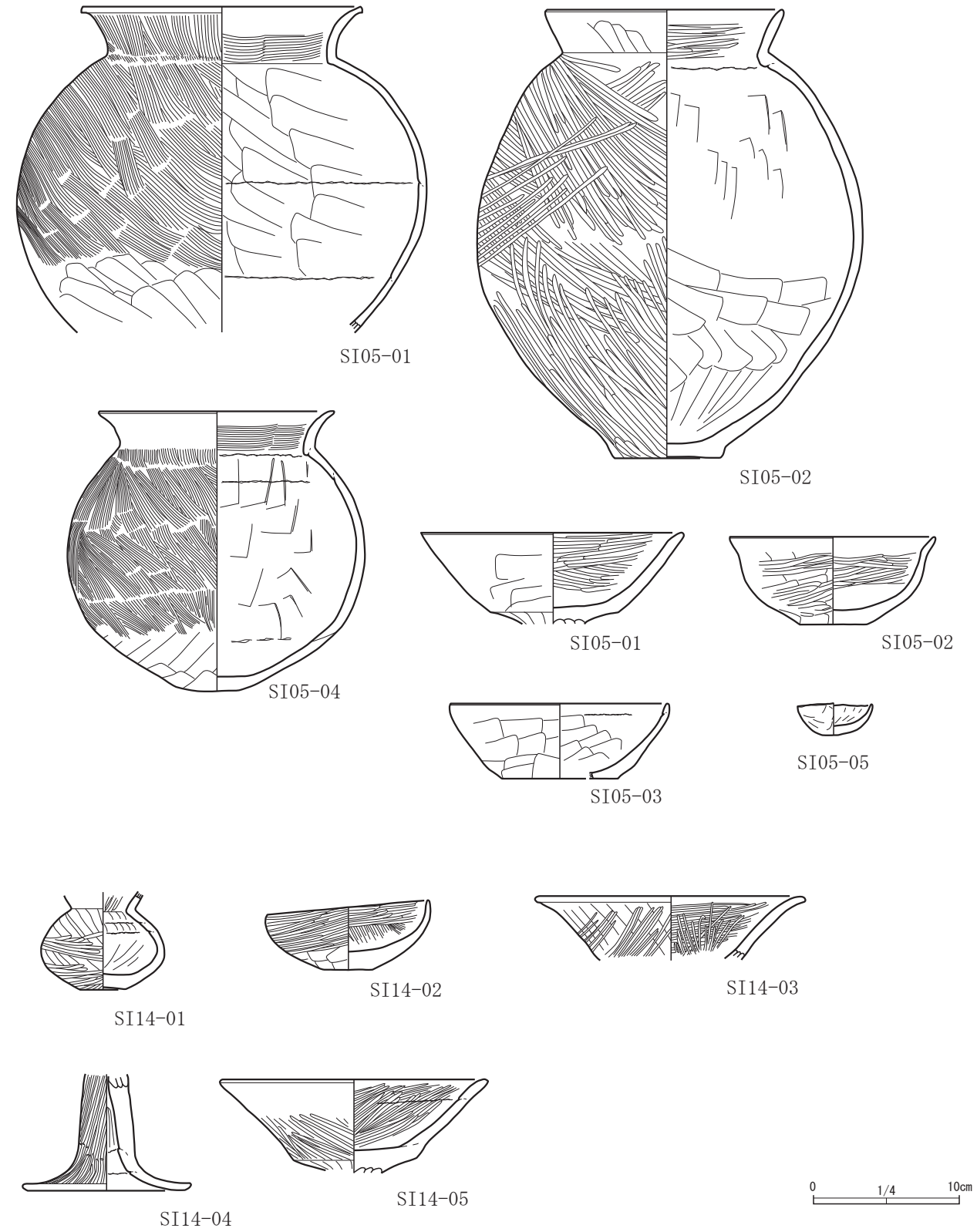
単位cm・g

遺構	報告番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
SI02	1	フット	土師器	甕	(13.8)	(3.8)	—	213.1	胴部は球形である。最大径はやや上位にある。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁は外反する。	口縁外面は横ナデ、内面はハケ後横ナデ。胴部外面は縦方向のハケ、内面はナデ後ミガキ。	良好	内面 5YR6/6橙 外面 5YR5/6明赤褐	白色粒子・雲母少量。白色針状物質微量。	口縁～胴部上位片	
SI04	1	1	土師器	器台	(8.0)	11.1	8.0	—	器受部はやや内湾して開く。中央の穿孔は脚部に続く。脚接合部は細く、裾は内湾して開く。脚部の穿孔は2段3単位である。	器受部内面はミガキ。二次焼成のため明確ではないが、外面はミガキ後ハケ。脚部内面は上部はナデ、下部は横ナデ。	良好 二次焼成 7)	内外面7.5YR7/8黄橙	白色粒子・雲母やや多量。黒色粒子少量。	器受部1/2欠損	黒斑7)。
SI06	1	フット	土師器	甕	(20.9)	—	<11.5>	114.3	胴部はやや張り、頸部で「C」の字に外反し、口唇部は狭み上げられる。	胴部は内外面ナデ。		内面5YR5/3明褐 外面7.5YR4/6褐			常総型甕
	2	フット	土師器	鉢	(19.6)	—	<10.3>	72.9	底部は欠損するが、体部は内湾して立ち上がり、口縁部で短く外反する。	ロクロ成形。体部外面下部回転へラケズリ。内面ロクロナデ後ミガキ。	良好	内面2.5Y7/4浅黄 外面2.5Y6/4にぶい黄	ほぼ精良。雲母少量。	口縁～体部1/8	内面黒色処理
	3	フット	土師器	坏	(13.8)	—	<4.7>	32.4	体部は直線的に大きく開く。底部は欠損。	ロクロ成形	良好	内面7.5YR4/1地灰 外面10YR4/1地灰	白色粒子・雲母少量。スコリア微量。		
	4	フット	土師器	坏	(13.1)	(6.9)	<4.3>	27.5	底部は平底。体部は内湾気味に立った後、直線的に開く。	ロクロ成形	良好	内面10YR5/4にぶい黄褐 外面10YR4/4褐	白色粒子・雲母少量。	体部～底部	
	5		須恵器	甕	—	—	<20.8>	270.1	胴部は直線的に開き、最大径は肩部にある。	頸部横ナデ。胴部外面縦格子状叩き目、下端へラケズリ。	良好	内面5Y7/3浅黄 外面5Y7/2灰白	雲母やや多量。小礫(長石・石英)少量。	胴部1/4	新治産
	6		須恵器	瓶	—	(14.0)	<11.5>	128.6	胴部は直線的に開く。底部は多孔式である。	胴部外面平行叩き。内面指頭圧痕後ナデ。輪積痕7)。	やや還元不良	内面5Y6/2灰オリーブ 外面7.5YR5/3にぶい褐	小礫(長石・石英)・雲母やや多量。	胴部下半～底部1/5	新治産
SI12	1	4	土師器	甕	(23.8)	(10.0)	<26.5>	—	底部は平底。長頸気味で口縁は「C」の字に外反し、口唇は僅かに狭み上げられる。	口縁部は横ナデ。外面は上位がナデ、下位がへラケズリ。底部はナデ。内面は胴部の器面が剥落するが、上位にナデが観察された。	良好 二次焼成 7)	内面10YR6/4にぶい黄橙 外面7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英・雲母やや多量。小～中礫やや多量。	口縁～底部1/2	常総型甕
SI19	1	4	土師器	埴	12.1	3.1	7.6	—	底部は上底気味の平底。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや内湾する。	口縁部横ナデ。内面へラナデ。外面へラケズリ。口縁を折り返した後頸部を指で整形する。	良好 二次焼成 7)	内面10YR5/4にぶい黄褐 外面10YR6/6明黄褐	小礫(長石・石英等)多量。雲母やや多量。白色粒子・黒色粒子少量。	ほぼ完形	
SI20	1	2, 4, 5, フット	土師器	甕	20.0	—	<17.0>	—	胴部は長頸気味で、口縁部は弱い「C」の字に外反し、口唇は狭み上げられる。	口縁部は横ナデ。外面は胴部はナデでへラの当りが上位に観察され、下位はミガキ。内面はへラナデ。	良好	内面7.5YR5/4にぶい褐 外面10YR6/6明黄褐	長石・雲母少量。	口縁～胴部上半	常総型甕
	2	2, 4, フット	土師器	甕	20.0	—	<17.8>	—	胴部はやや張りがある長胴で、口縁部は「C」の字に外反し、口唇は緩やかに内湾する。	口縁部～胴部外面上位は横ナデ。内面と胴部外面中位はナデ。胴部外面下位はミガキ。	良好	内面5YR4/4にぶい赤褐 外面5YR5/6明赤褐	小礫(長石)やや多量。雲母少量。	口縁～胴部1/2	常総型甕
	3	フット	土師器	甕	(20.2)	—	<8.0>	—	胴部は張り、口縁部は「C」の字に外反し、口唇は狭み上げられる。	口縁部は横ナデ。内外面ナデ。	良好	内面7.5YR7/6橙 外面7.5YR6/6橙	小～中礫(長石・石英)・雲母やや多量。	口縁～胴部1/4	常総型甕
	4	3, 7, 8, フット	須恵器	瓶	31.0	(14.0)	21.7	—	多孔式の瓶。胴部は直線的に開き、口縁部は「C」の字状で、口唇は僅かに狭み上げられる。	口縁部は横ナデ。外面は胴部上位に縦格子叩き、中位～下位に平行叩きが見られ、下端にはへラケズリがなされる。胴部内面は輪積痕・指頭圧痕7)。	良好	内外面 2.5Y5/2暗灰黄	雲母・長石やや多量。小礫(小～大)少量。	口縁～胴部3/4	新治産
	5	9, フット	須恵器	高台付坏	13.8	7.5	6.0	—	高台は「ハ」の字に付され、内湾接合。内湾して立ち上がり、体部との境に弱い稜を有し、直線的に開いた後口唇で僅かに外反する。	ロクロ成形。底部外面は右回転の回転へラケズリ。	良好	内面 10YR5/3にぶい黄褐 外面 10YR4/1地灰	長石・雲母やや多量。	口縁～体部1/5欠損	新治産
	6	1	須恵器	高台付盤	—	11.5	<3.5>	—	高台は「ハ」の字に付される。体部は直線的に開く。	ロクロ成形。底部外面は回転へラケズリ。	良好	内外面 10YR5/2灰黄褐	礫(中～大)・白色針状物質やや多量。	体部下半～底部	常総型または南比企産。底部外面焼成後へラ記号。転用説。
	7	フット	須恵器	高台付坏	—	7.3	<2.5>	—	高台は「ハ」の字に付され、内湾接合。体部下端に稜を持つ。	ロクロ成形。底部外面は回転へラケズリ。	良好	内外面 5Y4/1灰	白色粒子やや多量。雲母微量。	体部下端～底部	

表4 3区出土遺物観察表(2)

単位cm・g

遺構	報告番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
SI22	1	フナ	土師器	甕	—	—	<9.2>	183.3	胴部の最大径部分のみの資料である。	外面はヘラケズリ後ミガキ。内面はナデ。	良好	内外面 10YR6/4にぶい黄褐色	白色粒子・黒色粒子・雲母微量	胴部大破片	内外面赤彩
SI25	1	2	土師器	坏	16.3	丸底	4.6		底部は丸底。体部は内湾した後、口縁は外反して開く。口縁部との境に僅かに稜を有する。	口縁部は横ナデ。外面は体部はナデ。底部はヘラケズリ。内面はヘラナデ後ナデ。	良好 二次焼成 77	内面10YR7/4黄褐色 外面10YR3/2黒褐色	雲母多量 白色粒子少量	完形	内外面赤彩
	2	1	土師器	坏	14.3	4.3	5.8		底部は上げ底。内湾して立ち上がり、口縁は緩やかに外傾する。頸部内面に明確な稜を持つ。	外面はミガキ。体部内面は放射状暗文が施される。	良好 二次焼成 77	内面2.5YR5/6明赤褐色 外面2.5YR4/6赤褐色	雲母・白色粒子・黒色粒子少量	ほぼ完形	外面黒色処理
	3	貯フナ	土製品	土玉	縦3.4	横3.5	孔径0.8		球形。	穿孔はやや斜めになる。	良好 二次焼成 77	5YR5/8明赤褐色	金雲母やや多量。長石・白色粒子少量	完形	
SI26	1	フナ	土師器	裝飾器台	—	—	<2.5>	177.9	蹄状突起の内側に口縁が貼付されるが、欠損のため坏部の形状は不明である。穿孔は3単位である。	外面は突起と坏部の接合部は縦方向の短いハケ、その他は横方向のミガキ。内面はミガキ。	良好	内外面 5YR6/6褐色	白色粒子・黒色粒子・雲母少量	坏部片	
	2	フナ	土師器	甕	(15.5)	—	<15.5>		胴部はやや張りの弱い球形。口縁は「く」の字に短く外反する。器壁はやや薄い。	外面から口縁部内面は粗いハケ。胴部内面はナデ。	良好 二次焼成 77	内面7.5YR6/8橙褐色 外面7.5YR5/6明褐色	白色粒子・雲母・白色針状物質微量	口縁～胴部上位片	
SK32	1	5	土師器	甕	—	(8.2)	<9.3>	256.3	底部は平底。やや直線的に立ち上がり、中位で内湾する。	底部に粒状の不明圧痕跡。数物痕跡。胴部下位には横方向のヘラケズリ、中位にはナデを施すが、縦方向の亀裂が見られる。胴部内面ナデ。胴部下端～底部内面には指頭圧痕跡。輪積痕跡。	良好 二次焼成 77	内面 7.5YR6/4にぶい褐色 外面 7.5YR5/4にぶい褐色	長石・石英や多量。雲母少量	胴部下半	
	2	4	土師器	甕(転用坏)	—	(8.0)	<4.2>	143.8	底部は平底。内湾して立ち上がる。甕下半割れ口を擬口縁とし、坏として転用したもの。	底部は多方向ヘラケズリ。胴部外面ヘラケズリ、内面はナデ。	良好	内面 7.5YR6/6褐色 外面 7.5YR5/6明褐色	雲母少量。白色粒子・白色針状物質微量	胴部1/2欠損	
	3	3区SK32-1	土師器	坏	11.5	5.5	4.5	132.2	底部は平底。体部は緩やかに内湾した後直線的に開く。	ロク口成形。外面は底部は一方方向の手持ちヘラケズリ。体部下端は横方向の手持ちヘラケズリ。内面はミガキ。	良好	内面7.5YR1.7/1黒褐色 外面7.5YR5/6明褐色	雲母多量。長石・石英少量。中確微量	体部1/2欠損	内面黒色処理。底部外面墨書「原」。
	4	3区SK32-7	土師器	瓶	—	(16.9)	<10.8>	59.1	胴部は直線的に開く。底部端部の面取りはシャープである。	外面は平行叩き、胴部下端はヘラケズリ。	還元不良	内面10YR5/1褐灰色 外面7.5YR4/2灰褐色	雲母多量。小礫(長石・石英)少量	胴部下端片	
遺構外	1	3-カマ	土師器	坏	(12.7)	—	<4.0>		底部は丸底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部との境に明確な稜を持つ。口縁はやや内傾する。	内面～口縁部外面は横ナデ。体部外面はヘラケズリ。	良好	内面 10YR4/2灰黄褐色 外面 10YR7/1黒褐色	雲母微量	口縁～体部1/4	内外面黒色処理
	2	3区	土師器	坏	(13.0)	丸底	3.0		平底気味の丸底。体部は内湾して立ち上がり、口唇に至る。	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラケズリ。輪積痕跡。	良好	内面7.5YR3/2黒褐色 外面7.5YR3/1黒褐色	白色粒子・雲母微量	1/3	内外面黒色処理
	3	3区	土師器	坏	(14.0)	丸底	<4.0>		平底気味の丸底。体部は内湾して立ち上がり、口唇に至る。	内面～口縁部外面はナデ。外面はヘラケズリ。	良好	内面5YR4/3赤褐色 外面7.5YR5/4にぶい褐色	白色粒子・雲母・スコリア・白色針状物質微量	口縁～体部1/3	
	4	3区	土師器	坏	(9.6)	丸底	3.5		底部は丸底。体部は内湾して立ち上がり、口唇に至る。	口縁部外面は横ナデ。外面はヘラケズリ。内面はミガキ。	良好	内面5YR3/1黒褐色 外面7.5YR5/6明褐色	小～中礫(長石・石英)多量。雲母少量		
	5	3-カマ	土師器	甕	—	(3.8)	<5.6>		球形の甕。底部は平底で底径は小さい。体部は内湾して立ち上がる。	外面はハケ。内面はミガキ。	良好	内面10YR4/3黄褐色 外面7.5YR4/4褐色	白色粒子・雲母微量	胴部下位～底部1/4	
	6	3-カマ	土師器	坏	(13.9)	丸底	<3.5>		底部は丸底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。	口縁部外面～内面は横ナデ。外面はヘラケズリ。	良好	内外面5YR5/6明赤褐色	白色粒子・黒色粒子・スコリア・白色針状物質微量	口縁～体部1/8	
	7	3-カマ	土師器	器台	—	—	<2.9>		蹄状突起の内側に口縁が貼付されるが、欠損のため坏部の形状は不明である。	外面接合部はハケ後ミガキ、その他はミガキ。内面はハケ後ミガキ。	良好	内外面7.5YR6/6褐色	白色粒子・黒色粒子・雲母・スコリア少量。白色針状物質微量	上端部片	
	8	3区外2フナ	土製品	土玉	縦3.5	横3.4	孔径0.8		球形。	穿孔はほぼ中心を貫通する。指による整形	良好	7.5YR6/6褐色	白色粒子・黒色粒子・雲母・小礫(石)少量	完形	赤彩



第26図 4区遺構出土遺物

表5 4区出土遺物観察表

単位cm・g

遺構	報告番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
S105	1	77d'	土師器	甕	19.1	—	<22.0>		胴部は球形である。口縁部は「く」の字に屈曲した後強く外反する。	口唇は面取りされる。外面は口縁～胴部中位はハケ、胴部下位はヘラケズリ、内面は口縁部は横ナデ後ハケ、胴部はナデ。輪積痕7/。	良好	内面10YR6/6明黄褐 外面10YR7/6明黄褐	雲母多量。白色粒子・大礫(長石・石英等)少量	口縁～胴部上半	
	2	77d'	土師器	甕	(16.2)	7.3	30.0		胴部は球形で中位よりやや下に最大径を持つ。底部は平底。口縁部は「く」の字に屈曲し、外傾して立つ。	外面は口縁部は横ナデ、胴部はヘラケズリ後ミガキ。内面は口縁部は横ナデ後ミガキ、胴部上半はヘラナデ、下半はナデ。	良好	内面10YR6/6明黄褐 外面10YR7/6明黄褐	雲母・小～中礫(長石・石英)やや多量。	胴部上半3/5欠損	
	1-a	4区 S10577d'	土師器	高坏	17.8	—	<6.1>		上埴部は接合部に稜を持ち、外傾して開く。	接合部はヘラケズリ。外面は口縁部は横ナデ、他はナデ。内面はミガキ	良好	内面10YR4/2灰黄褐 外面10YR5/3にぶい黄褐	雲母・小～中礫(石英)やや多量。白色針状物質微量。	上埴部1/2	
	2-a	4区 S10577d'	土師器	坏	14.0	4.5	6.0		底部は平底。体部は下半で外傾して立ち上がり、内湾し、口縁部で外反して開く。	口縁部は横ナデ。外面はナデ後ミガキ。内面は底部は器面剥落するが、体部でミガキが観察される。	良好	内外面5YR5/6明赤褐	白色粒子・小～中礫やや多量。黒色粒子・雲母・スコリア少量。	上埴部1/3欠損	
	3	4区 S10577d'	土師器	坏	(14.8)	(8.0)	5.0		底部は平底。体部は下半で外傾して立ち上がり、口縁部で内湾して直立する。	口縁部は横ナデ。内外面はナデ。底部外面はヘラケズリ。	良好	内面7.5YR5/6明褐 外面10YR5/4にぶい褐	雲母・小～中礫(長石・石英)やや多量。	1/4	
	4	77d'	土師器	甕	16.2	3.0	18.8		球形。最大径は胴部中位にある。底部は平底で小さい。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字に外反する。	口縁部は横ナデ。外面は頸部～胴部中位までハケ。下位はヘラケズリ。内面は口縁部は横ナデ後ハケ。胴部はヘラナデ。底部外面はナデ。輪積痕7/。	良好 二次焼成7/	内面7.5YR6/6橙 外面7.5YR5/6にぶい褐	雲母・小～中礫(長石・石英)やや多量。	胴部1/2欠損	
	5	77d'	土製品	手づくね	5.1	丸底	<2.2>		底部は丸底。体部は内湾して立ち上がり口唇に至る。	内外面指による成形。	良好	内面7.5YR5/6明褐 外面10YR5/6黄褐	白色粒子やや多量。雲母少量。	ほぼ完形	
	6		礫		縦3.0	横2.1	厚1.6								
7		礫		縦5.3	横3.9	厚2.5									
8		礫		縦5.2	横4.0	厚1.65									擦痕7/。
S114	1	1	土師器	埴	—	3.0	<6.6>		胴部最大径は中位よりやや下である。底部は上げ底気味の平底。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字に屈曲して開く。	外面はヘラケズリ後横方向のミガキ。内面は口縁部はミガキ。胴部はナデと上位に指による整形が見られる。	良好	内外面7.5YR6/6橙	白色粒子・黒色粒子・雲母・小礫微量。	口縁部欠損	
	2	2	土師器	坏	(11.1)	3.4	4.7		底部は平底。体部は外傾して立ち上がった後、内湾する。	外面は底部はナデ、体部下端はヘラケズリ、その他はミガキ。内面はミガキ。	良好	内外面10YR6/4にぶい黄褐	黒色粒子・小～中礫(石英)やや多量。白色粒子・雲母少量。	口縁部ほぼ欠損	
	3	77d'	土師器	高坏	(18.6)	—	<4.3>		上埴部のみの資料。体部は内湾して立ち上がる。口縁部は外反して大きく開く。	外面はナデ後ミガキ。内面は細かいミガキ。	良好	内外面10YR7/6明黄褐	黒色粒子・小～中礫少量。	上埴部1/4	
	4	77d'	土師器	高坏	—	(11.4)	<8.0>		脚部みの資料。脚柱部は僅かに膨らみ、裾は水平に広がる。	外面はミガキ。内面はナデ。輪積痕7/。	良好	内外面7.5YR6/6橙	長石・雲母やや多量。黒色粒子・雲母微量。	脚部1/5	
	5	77d'	土師器	坏	18.0	—	<6.3>		上埴部のみの資料。上埴部下端に稜を有し、やや外反して立ち上がる。	口縁部横ナデ。外面は接合部はヘラケズリ、その他はミガキ。内面はミガキ。輪積痕7/。	良好	内面7.5YR5/6明褐 外面7.5YR4/3褐	雲母・小～中礫(長石・石英)	1/4欠損	
S120	1	77d'	土師器	坏	15.0	丸底	5.0		底部は丸底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部でやや外反する。			内面2.5YR5/6明赤褐 外面10YR5/4黄褐			内面赤彩

表6 4区SK03出土貝組成表

単位: cm

オオノガイ			アサリ			ハマグリ			マガキ			オキシジミ		
殻幅	右	左	殻幅	右	左	殻幅	右	左	殻長	蓋	身	殻幅	右	左
0.5~1	74	91	0.5~1	0	0	0.5~1	0	0	0.5~1	11	0	0.5~1	0	0
1.1~1.5	57	71	1.1~1.5	0	0	1.1~1.5	0	0	1.1~1.5	76	7	1.1~1.5	0	0
1.6~2.0	20	12	1.6~2.0	0	0	1.6~2.0	0	0	1.6~2.0	344	187	1.6~2.0	0	0
2.1~2.5	1	3	2.1~2.5	0	0	2.1~2.5	1	2	2.1~2.5	419	488	2.1~2.5	0	0
2.6~3.0	0	0	2.6~3.0	0	0	2.6~3.0	0	0	2.6~3.0	223	511	2.6~3.0	0	0
3.1~3.5	0	0	3.1~3.5	1	0	3.1~3.5	0	1	3.1~3.5	35	256	3.1~3.5	0	1
3.6~4.1	0	0	3.6~4.1	0	1	3.6~4.0	0	0	3.6~4.0	13	97	3.6~4.0	0	0
4.1~4.5	0	0	4.1~4.5	0	0	4.1~4.5	0	0	4.1~4.5	2	39	4.1~4.5	1	0
4.6~5.0	0	0	4.6~5.0	0	0	4.6~5.0	0	0	4.6~5.0	0	7	4.6~5.0	0	0
5.1~5.5	0	0	5.1~5.5	0	0	5.1~5.5	0	0	5.1~5.5	0	2	5.1~5.5	0	0
5.6~6.0	0	0	5.6~6.0	0	0	5.6~6.0	1	0	5.6~6.0	0	0	5.6~6.0	0	0
合計	152	177	合計	1	1	合計	2	3	合計	1123	1594	合計	1	1
ヤマトシジミ			サルボウ				二ナ類		ハイガイ					
殻幅	右	左	殻幅	右	左	合わせ	殻長		殻幅	右	左			
0.5~1	0	0	0.5~1	0	0	0	0.5~1	8	0.5~1	0	0			
1.1~1.5	0	0	1.1~1.5	0	0	0	1.1~1.5	13	1.1~1.5	0	0			
1.6~2.0	1	3	1.6~2.0	0	0	0	1.6~2.0	92	1.6~2.0	0	0			
2.1~2.5	9	5	2.1~2.5	0	4	0	2.1~2.5	116	2.1~2.5	0	0			
2.6~3.0	7	4	2.6~3.0	18	18	0	2.6~3.0	40	2.6~3.0	0	0			
3.1~3.5	0	0	3.1~3.5	64	55	0	3.1~3.5	2	3.1~3.5	0	0			
3.6~4.1	0	0	3.6~4.0	87	71	6	3.6~4.0	1	3.6~4.0	0	0			
4.1~4.5	0	0	4.1~4.5	59	59	14	4.1~4.5		4.1~4.5	0	0			
4.6~5.0	0	0	4.6~5.0	15	15	5	4.6~5.0		4.6~5.0	1	1			
5.1~5.5	0	0	5.1~5.5	1	3	0	5.1~5.5		5.1~5.5	0	0			
5.6~6.0	0	0	5.6~6.0	0	0	0	5.6~6.0		5.6~6.0	0	0			
合計	17	12	合計	244	225	25	合計	272	合計	1	1			

表7 5区SI06 出土具組成表

単位：cm

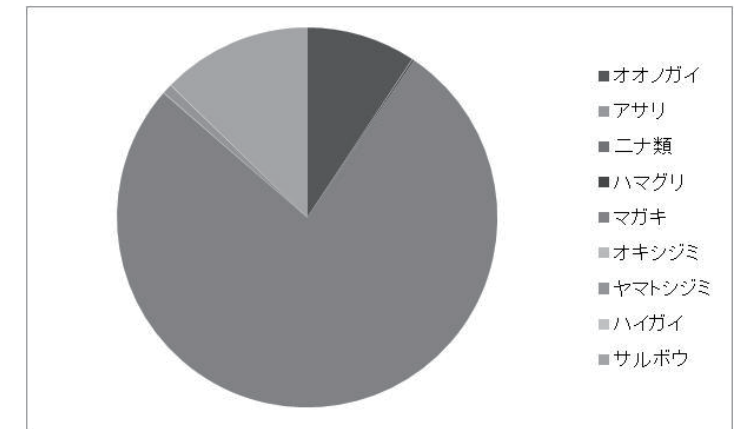
オオノガイ			ハマグリ			マガキ			オキシジミ			ヤマトシジミ			ハイガイ		
殻幅	右	左	殻幅	右	左	殻長	蓋	身	殻幅	右	左	殻幅	右	左	殻幅	右	左
0.5~1	8	7	0.5~1	0	0	0.5~1	0	0	0.5~1			0.5~1	0		0.5~1		
1.1~1.5	1	1	1.1~1.5	0	0	1.1~1.5	0	0	1.1~1.5			1.1~1.5	1	1	1.1~1.5		
1.6~2.0	0	2	1.6~2.0	0	0	1.6~2.0	0	0	1.6~2.0			1.6~2.0	1	3	1.6~2.0		1
2.1~2.5	0	0	2.1~2.5	8	2	2.1~2.5	3	0	2.1~2.5			2.1~2.5	1	3	2.1~2.5	15	4
2.6~3.0	0	0	2.6~3.0	10	3	2.6~3.0	2	4	2.6~3.0			2.6~3.0	0	1	2.6~3.0	38	43
3.1~3.5	0	0	3.1~3.5	0	1	3.1~3.5	4	12	3.1~3.5		1	3.1~3.5	0	0	3.1~3.5	48	47
3.6~4.0	0	0	3.6~4.0	1	2	3.6~4.0	7	9	3.6~4.0			3.6~4.0	0	0	3.6~4.0	30	23
4.1~4.5	0	0	4.1~4.5	1	0	4.1~4.5	4	13	4.1~4.5	1		4.1~4.5	0	0	4.1~4.5	16	18
4.6~5.0	0	0	4.6~5.0	0	0	4.6~5.0	0	16	4.6~5.0			4.6~5.0	0	0	4.6~5.0	2	9
5.1~5.5	0	0	5.1~5.5	0	0	5.1~5.5	2	7	5.1~5.5	1	1	5.1~5.5	0	0	5.1~5.5	0	1
5.6~6.0	0	0	5.6~6.0	0	0	5.6~6.0	1	5	5.6~6.0	0	0	5.6~6.0	0	0	5.6~6.0		
6.1~6.5	0	0	6.1~6.5	0	0	6.1~6.5	2	7	6.1~6.5	0	0	6.1~6.5	0	0	6.1~6.5		
6.6~7.0	0	0	6.6~7.0	0	0	6.6~7.0	2	3	6.6~7.0	0	0	6.6~7.0	0	0	6.6~7.0		
7.1~7.5	0	0	7.1~7.5	0	0	7.1~7.5	3	3	7.1~7.5	0	0	7.1~7.5	0	0	7.1~7.5		
7.6~8.0	0	0	7.6~8.0	0	0	7.6~8.0	0	2	7.6~8.0	0	0	7.6~8.0	0	0	7.6~8.0		
8.1~8.5	0	0	8.1~8.5	0	0	8.1~8.5	0	1	8.1~8.5	0	0	8.1~8.5	0	0	8.1~8.5		
8.6~9.0	0	0	8.6~9.0	0	0	8.6~9.0	0	1	8.6~9.0	0	0	8.6~9.0	0	0	8.6~9.0		
合計	9	10	合計	20	8	合計	30	83	合計			合計	3	8	合計	149	146

表8 5区SI09・10 出土具組成表

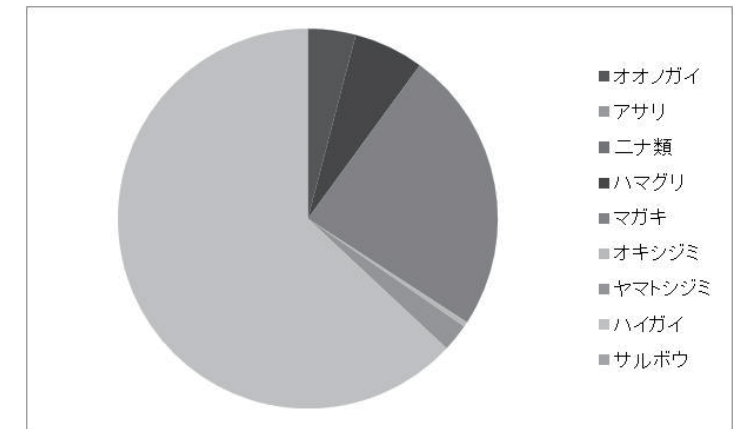
オオノガイ			マガキ			ヤマトシジミ				ハイガイ			
殻幅	右	左	殻長	蓋	身	殻幅	右	左	合わせ	殻幅	右	左	合わせ
0.5~1	0	1	0.5~1	0	0	0.5~1	0	0	0	0.5~1	0	0	0
1.1~1.5	2	4	1.1~1.5	0	0	1.1~1.5	0	0	1	1.1~1.5	0	0	0
1.6~2.0	2	2	1.6~2.0	0	0	1.6~2.0	57	82	8	1.6~2.0	2	0	1
2.1~2.5	0	0	2.1~2.5	0	1	2.1~2.5	80	94	0	2.1~2.5	29	29	12
2.6~3.0	0	0	2.6~3.0	10	1	2.6~3.0	22	20	0	2.6~3.0	57	61	15
3.1~3.5	0	0	3.1~3.5	15	16	3.1~3.5	0	0	0	3.1~3.5	15	22	4
3.6~4.0	0	0	3.6~4.0	12	16	3.6~4.0	0	0	0	3.6~4.0	17	20	6
4.1~4.5	0	0	4.1~4.5	20	25	4.1~4.5	0	0	0	4.1~4.5	5	10	10
4.6~5.0	0	0	4.6~5.0	7	12	4.6~5.0	0	0	0	4.6~5.0	3	3	1
5.1~5.5	0	0	5.1~5.5	3	17	5.1~5.5	0	0	0	5.1~5.5	0	0	1
5.6~6.0	0	0	5.6~6.0	2	7	5.6~6.0	0	0	0	5.6~6.0	2	0	0
6.1~6.5	0	0	6.1~6.5	2	2	6.1~6.5	0	0	0	6.1~6.5	0	0	0
6.6~7.0	0	0	6.6~7.0	2	2	6.6~7.0	0	0	0	6.6~7.0	0	0	0
7.1~7.5	0	0	7.1~7.5	1	1	7.1~7.5	0	0	0	7.1~7.5	0	0	0
7.6~8.0	0	0	7.6~8.0	0	0	7.6~8.0	0	0	0	7.6~8.0	0	0	0
8.1~8.5	0	0	8.1~8.5	0	0	8.1~8.5	0	0	0	8.1~8.5	0	0	0
8.6~9.0	0	0	8.6~9.0	0	0	8.6~9.0	0	0	0	8.6~9.0	0	0	0
9.6~10.0	0	0	9.6~10.0	1	0	9.6~10.0	0	0	0	9.6~10.0	0	0	0
合計	4	7	合計	75	100	合計	159	196	9	合計	130	130	50

表9 出土具集計表

4区SK03	右	左	合計
阿玉台			
オオノガイ	152	177	329
アサリ	1	1	2
二ナ類	0	0	0
ハマグリ	2	3	5
マガキ	1123	1594	2717
オキシジミ	1	1	2
ヤマトシジミ	17	12	29
ハイガイ	1	1	2
サルボウ	224	225	449



5区SI06	右	左	合計
関山2			
オオノガイ	9	10	19
アサリ	0	0	0
二ナ類	0	0	0
ハマグリ	20	8	28
マガキ	30	83	113
オキシジミ	1	1	2
ヤマトシジミ	3	8	11
ハイガイ	149	146	295
サルボウ	0	0	0



5区SI9.10	右	左	合計
オオノガイ	9	10	11
アサリ	0	0	0
二ナ類	0	0	0
ハマグリ	20	8	0
マガキ	30	83	175
オキシジミ	1	1	0
ヤマトシジミ	3	8	373
ハイガイ	149	146	375
サルボウ	0	0	0

